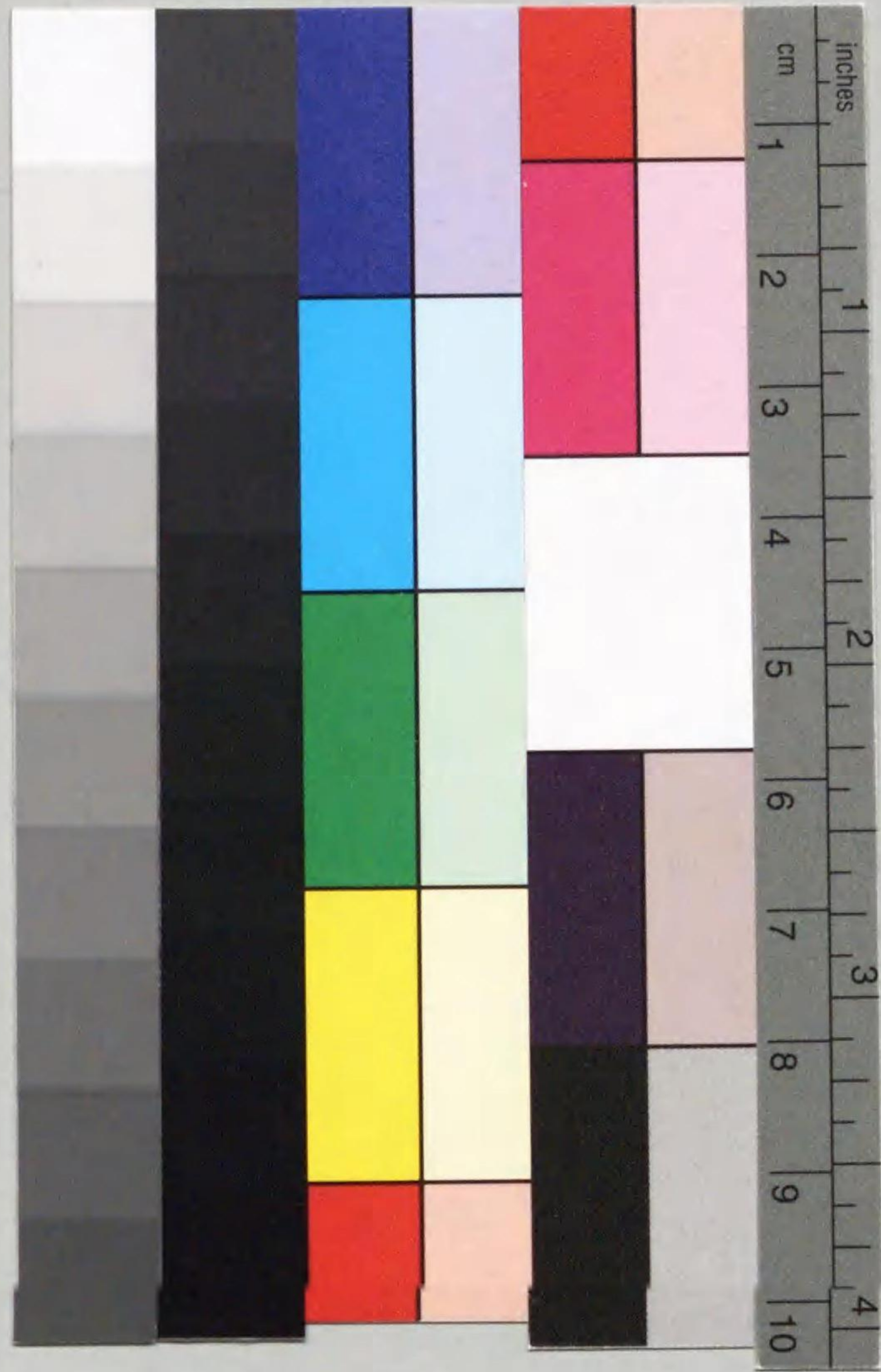


KH249-H132



1200400101995





芝御前



乞御高書



KH249-H132

目次

かなしきピエロ……………(二)

春……………(二二)

或る求婚者……………(三八)

エロスの戯れ……………(五七)

過失……………(七三)

不思議な愛情……………(九三)

黄婚の花……………(一〇八)

劇場で……………(一二四)

心の秘密……………(一四一)

ダリアの嘆……………(一五八)

須藤重装幀



I種
W



1200400101995

懊惱の日……………(一七三)
 愛するが故に……………(一九〇)
 恥深き會話……………(二〇六)
 ある喜劇役者……………(二三五)
 裂かれたる心臓……………(二三七)
 不言不語……………(二五五)
 新妻……………(二六八)
 相剋……………(二八六)
 青い鳥……………(三〇一)
 『愚なる八千代』……………(三一七)
 狂戀……………(三三一)
 幻影……………(三四九)

ペアトリチエ……………(三六七)
 偶像……………(三八四)
 鳴咽……………(三九八)
 死床の願ひ……………(四一六)
 愛する者の道……………(四三〇)
 秘めたるまゝに……………(四四六)

愛

染

草

加

藤

武

雄

かなしきヒエロ

八千代は、筑土八幡前で電車を捨てると、少し行つて左へ廻つて、その横町の取附の三階建の下宿屋の明け放しになつた入口へ、小走りに、走り込むやうにした。

「御免下さい。」

午後二時頃の下宿屋は、物音もなく静まり返つて、彼女の、聊かうるみを含んだ艶のある聲は、きまりが悪いほど高く響いたが、取次の女中はなか／＼出て来なかつた。

「御免下さい。」

もう一度彼女は呼んで見た。そして、當惑したやうに、しばらくそこに立つてゐた。薄暗い土間の中に、薄藤色にほかしたシャルムーズを羽織つた八千代の、すらりと脊の高い豊艶な姿が、夕暮の庭にさゆらぐ大輪の花のやうに浮立つて見えた。

「御免下さい。」

と、更にもう一度呼ぶと、ぱたり／＼と重い草履の音がして、見知り越しの女中が、ほんやりし

顔で出て来た。

「辻さん、いらしつて？」

八千代は、一寸しなをして訊いた。

「辻さんですか！」

女中は、妙な笑ひを含んだ眼で、まじ／＼と、その美しい訪問者の顔を見ながら、

「いらッしやいますよ。どうぞ。」

度々の訪問なので、もう案内して貰ふまでも無かつた。八千代は、女中に會釋すると、そこから、すぐに二階に通じてゐる階段を、とん／＼と軽快な足どりで登つて行つた。

此の前の時は、二階のはづれの部屋に、不良少年染みたのが二三人ごろ／＼してゐて、「よう！」とか、「やあ！」とか囃し立てて、顔が赤くなるやうな雑言を浴びせかけたが、今日は幸ひ何人も居なかつた。その部屋の角を廻つて、もう一つ階段をのほると、その三階のとツつきが、辻益夫の部屋になつてゐた。

「益夫さん！」

八千代は、障子の際に立つて、さう呼びかけたが返事が無かつた。

おや、居ないのか知ら？ と思つたが、スリツパがある。……あら、ぢや、また寝てゐるんだわ。

八千代は、そつと、開きをあけた。案の定益夫は、きたない蒲團にくるまつて、すう／＼と鼻を立てゝゐた。

八千代は、微笑を浮かべながら、部屋へはひつて行つたが、その六疊の部屋は、坐らうにも坐り場所が無いほど、取り散されてゐた。一方の壁は、ぎつしりと本のつまつた本箱で埋められ、窓際には、部屋の割に大き過ぎる机が置かれてあつて、その机の上も、頁を開いたまゝの本や、書きかけの原稿紙や、そんなものが、亂雑な堆積を成してゐる。そして、机の廻りから、枕もとにかけて、枕もとから、その反對の入口の方にかけて、火鉢だの、炭取だの、茶器だの、讀捨ての新聞だの、蜜柑の皮だの、押丸めた紙屑だの、衣紋竹から落ちた古羽織だの、そんなものが、とてもだらしがなく入り亂れてゐる上に、窓をしめきりにしておくので、煙草の煙が、寢臭い息と一緒にむつと籠つてゐる。女中もろく／＼掃除もして呉れないと見えて、踏む足もとから、ばつと埃が立ちさうである。

「まあー」

と、八千代は思はず眉を擡めたが、手にしてゐたオペラブックや、買物の包みを机の上に置くと甲斐々々しい様子で、その取り散らされてゐるものを片付けはじめた。衣紋竹から落ちた古羽織は皺をのばして畳まれたり、讀みすての新聞は丁寧に重ねられたり——敏捷に動く彼女の白い手で、部屋は見ると、整然とととのへられて行つた。

そして、漸く坐り場所をこしらへた八千代は、机の前の、彼女がつい一月ほど前に手づから縫つて贈つたところの、此の殺風景な部屋には不似合のはでな友禪メリンスの蒲團の上に坐つて、今度は、机の上の整理をはじめた。

本は小口を揃へて積みあげられ、原稿は、頁を追うて重ねられた。原稿の頁附を讀みながら、八千代は、益夫の仕事が、遅々として進まずにゐる事を知つた。此の前來て見た時は、はさだつた。それが、未だ／＼にしかなつてゐない。凡そ二週間の間に、十枚をこ／＼しか出来てゐないのである。三千枚を越える見込みだといふ大著述も、この分では何時完成することやら？

仕方が無わねえ。また、なまけ出してゐるんだわ！——八千代は、斯う心に眩きながら親しみに充ちた眼を益夫の寝顔に送つた。もぢや／＼と鳥の巢のやうな髪を青白い額に亂して、血の色の薄い唇を半ば開いてすう／＼と寢息を刻んでゐる益夫は、餘程深い眠りに落ちてゐると見えて、

「益夫さん、益夫さん！」

と、二聲ばかり呼んで見たが、眼を覚ます氣配も無かつた。何だか酷く疲れてゐるらしい。自然に眼が覚めるまで待たうと思ひながら、八千代は、片付けかけの机に眼と手とを戻したが、ふと、その西洋哲學史の原稿の中に、一枚の樂書がまじつてゐるのを見出した。何氣なく讀んで見るに、歌のやうな、詩のやうな文句が、十行ばかり、消したり書いたりしてあつた。

いささめに君を戀すといはなくて

こんな文句があつた。

戀草を力ぐるまに七車

積みて戀ふらくわが心から

こんな、萬葉の歌が書いてあるかと思ふと、

ピエロ、ピエロ

をかしきピエロ

かなしきピエロ

ピエロの戀はをかし
ピエロの戀はかなし
かなしき故にをかし
をかしき故にかなし

詩めいた五六行がその次に記されてゐた。

へんな樂書だわね。これは益夫さんが書いたのか知ら？ 矢張益夫さんの字だわ！ まあ、何のつもりで、こんな樂書をしたんだらう？ もしかしたら、此の人は、何人かに戀でもしてゐるのか知ら？ 然う思ひながら、もう一度八千代は益夫の寝顔を眺めた。眉と眉との間に深い縦皺が刻まれてゐる。ぢぢむさく鬚の生えた顎が、うそ寒く尖つてゐる。かうして寝てゐる顔は、別人のやうに陰鬱で、ひどく物惱ましげで、何か胸に悶えを裏んでゐるらしく見える。本當に、戀でもしてゐるのか知ら？ 此の人だつて未だ若いんだもの、戀をしたつて些とも不思議は無ければ——けれども、此人が戀をしてゐるのかと思ふと、そしてこんな樂書をしたのかと思ふと、八千代は矢張をかしかつた。何さなく吹き出し度い氣がして來た。起きたら、うんとからかつてやらう、あぶらをとつてやらう——八千代は笑ひを嚙み殺しながら、さう思つた。

が、益夫はなかく、眼を覺まसानかつた。八千代は、待ちくたびれて、もう一度呼んで見たが、矢張駄目だつた。胸のところに手をかけて、揺つて見た。それでも起きなかつた。

まあ！ あきれた人だわ！ 業を煮やした八千代は、手をのばすと、その鼻のあたまで、人さし指と拇指とで搦んで、そつと引ばるやうにした。

『ほゝ。益夫さん、やつとお眼覺めね。』

驚いて、ほつかりと眼を開いた益夫の顔の上から、八千代は嬌かしい高い笑ひ聲をあびせかけた。

『やあ、八千代さんだつたのかい？ 吃驚した。』

益夫は、寢床の上に起きあがつて、その、あまり大きくない、しかし、くるりと丸い眼をまばゆさうに八千代の方に睨いた。

『呆れちやつたわ。あなたのおねほうさんにも——』

『何時來たんです？』

『もう、一時間も前よ。』

『さうか。失敬したね。起きて呉れりや宜かつたのに。』

『何度も起したけれど、お起きにならないぢやあないの。』

『然うだつたかい？ 失敬したね。昨夜、おそくまで起きてゐたもんだからね。』

『でも、もうお午過ぎぢやありませんか？ よく眼が流れないことね。』

『近ごろ神経衰弱なんですよ。嗜眠性神経衰弱ていふんださうだ。』

『昨夜おそくまで、何をして起きていらしたの？』

『勉強してゐたのさ。』

『勉強？』

と、八千代は笑ひながら、その樂書の紙を益夫の鼻先に突き出すやうにして、

『益夫さん、これ何あに？』

『何だい？ それは？』

『この樂書、あなたが書いたんでせう？』

益夫は、それが何であるかに氣がつくと、酷く狼狽したやうに、見る／＼顔を赤くして、

『いけないな。そんなものを引張り出して。』

『引張り出したのぢやないのよ。こゝにあつたのよ。』

「あゝ、八千代さん、片付けて呉れたんだね。どうもありがたう。」

益夫は、すっかり整頓された部屋の様子に、はじめて気がついて、斯う禮を云つた。

「そんな事よりも、これ何あに？ これ、あなたが書いたんでせう？」

八千代は、いたづらいたづらした眼付で追ひつめて、

「ピエロ、ピエロ、をかしきピエロ、かなしきピエロつて何のこと——」

「それはね——それはね。」

「これ、戀の詩だわね？」

「さうだよ——まあ、そんなものだよ。」

「あなたがお作りになつたの？」

「いや、さうぢやあない。」 益夫は、益々へどもどしながら云つた。

「ぢや、何人の詩なの？ 白秋？ 八十？ ——いゝえ、矢張あなた御自身のだわ、でなきや、こ

んな拙い詩なんか作る人はないわ。」

「そんなにまづいかな？」

「えゝ、とてもまづいわ。」

「さうかなあ。でも、仕方がないさ。僕は哲學者で、詩人ぢやないんだから。」

「どうしてこんな詩を作つたの？」

「たゞの樂書だよ。」

「樂書にしてもをかしいわ——あなた、戀をしていらつしやるの？」

「どうも猛烈に追窮するなあ、八千代さんは。」

ミ、益夫は、血色のあまりよくない頬を、子供ツほい羞耻に赤めたが、冗談とも眞面目ともつか

ない調子で、

「さうだよ。僕は戀してゐるんだよ。」

「本當？」

「本當とも。哲學者だつて、仙人だつて、戀のひとつぐらゐするさ。」

「さう？」

八千代は笑はうとしたが、冗談めいた益夫の調子の中に、案外眞剣なものが潜んでゐるやうに思はれたので、思はず眞顔になつて、

「でも、あなたが戀をなさるなんて、何だか信じられない氣がするわね。それでどうなの？ 結果

は？」

「かはいさうに片戀さ。はゝゝゝ。かなしきピエロさ。」益夫は笑つた。

「それで、神經衰弱におなりになつたのね？」

「多分然うだね。」

「一體相手は誰？ どんな人？」

「それは云へない。」

「私の知つてゐる人？」

「無論、八千代さんの知つてゐる人ですよ。」

「無論——？ 何人でせうねえ。」

八千代は、自分の知つてゐる人で、益夫と交渉のある女の人を、誰彼と數へあげて見たが、益夫の對象になりさうな人は、さう考へても考へ當たらなかつた。此の人が戀をする。矢張どうも、へんである。此の飄々たる、風々來々たる、老書生の哲學者を、戀といふ字と結びつけて考へるのは、不自然と云ふよりも、寧ろ不可能の事に八千代には思はれるのであつた。

「わからないわねえ。」

「わからないかい？」

「わからないわ。云つて頂戴。」

「云つてもいゝけれど、まあ止さう。」

「私になら云つて下すつてもいゝでせう。」

「云つたら、八千代さんは相談相手になつて呉れるかい？」

「えゝ。なつてあげるわ。」

「ぢや、一つ八千代さんに加勢を頼まうかな。」

益夫は、にや／＼と笑ひ乍ら云つた。

「えゝ、加勢してあげるわ。だから、その相手の人の名を話して頂戴。」

「話してもいゝけれど——まあ、止さう。」

「どうして、私にも云へないの？」

「云へない。」

「どうして云へないの？」

こんな押問答のうちに八千代は、妙に焦立たしい氣持になつて來た。戀とか何とか、然う云ふ性

的なものを別にして、八千代は益夫を愛してゐた。兄の親友として、その生前にも、兄同様に親しんでゐたが兄が亡くなつてからは、亡兄に對する思慕の情をも併せ捧げて、八千代は妹のやうな無邪氣さで、偏に益夫を懐かしんでゐた。その脱俗的な、どこかにとほけたところのある、仙人染みた風格のうちにも、濃い濃かな情緒を湛へた益夫の心——それは、何人のもでもない、自分のものなのだ、と、八千代は思つてゐた。が、今、益夫が、他の女を戀してゐるらしい事を知るこゝ、嫉妬に似た、わけのわからない妙な感情が、悶々しく八千代の胸に渦巻くのであつた。それが抑捺や、笑ひやではごまかしきれない、案外執拗な、底の深い感情である事に氣がつくと、八千代は、われと我が、思ひがけない心の動きの前に狼狽せざるを得無かつた。

「云へないなら、いゝわよ。私聞き度ありませんから。」

「はゝゝ。八千代さん、怒つたのかい？」

「怒りやしないけど、をかしいわ。こんな甘ツたるい文句なんか——私、嫌ひ！」

「うそだよ。うそだよ。それはね、唯、出鱈目に書いたんだよ。今云つた事もみんな出鱈目だよ。はゝゝ。」

益夫は天井を眺めながら、さも可笑しさうに笑つた。一旦起きかへつた益夫は、いつかまた、寝

床の上に仰向になつてゐた。

「本當？ うそだつていふのは本當？」

「本當だよ。うそだよ。」益夫は尙ほ笑ひ續けながら云つた。

「それぢや判らないわ。本當なの？ うそなの？」

「うそだといふのが本當なんですよ。」

「さう、それならいゝけど——」

益夫の答へを曖昧なものには聞きながらも、八千代は、それで何か知ら、ほつとしたやうな、胸がらくになつたやうな氣がした。

「何だか判らないけど、そんな事まあ、どうでもいゝにして、兎に角お起きなさいな。ひとが折角訪ねて来てあげたのに——」

「うむ。起きようかた？」

「さあ、お起きなさいツたら——」

八千代はさう云ひながら、いきなり、掛蒲團の上に投げ出した益夫の両手を、はでな襦袢の袖を捲きつけた生々しく肉付いた自分の両手にぐいと攔んで力一ぱいに引起こさうとした。二つの活物

のやうに、活々と輝く黒瞳勝ちの眼、鼻梁の通つた上品な恰好の鼻、美しい脂粉の顔を笑ひに崩しながら、のしかゝるやうにした身體と一緒に近々とさしよせて、

「さあ、そんなにしちや駄目よ。起きて頂戴ッたら！」

襦袢の襟から、少し押しはだけられた襟元や、乳房の形に盛りあがつた胸の、笑ひと共に起伏するのを眼の前に見ながら、成熟し切つた處女の、なやましい身體の匂ひに息つまらされた益夫はその取られた手を振りほどくやうにして、床の上に起きあがつたが、てれかくしの微笑を元氣のない顔にうかべて

「また今日は馬鹿におめかししたもんだね。まばゆいくらゐだよ。何處へ行つたの？」

「上野の方のお友達のところへ行くつもりで出たんですけど、氣が變つてお寄りしたの。——お土産があるのよ。」

八千代は机の上に置いたポオル箱の包みを、益夫の方へ押遣るやうにして、

「顔を洗つておいでなさいな。でなきや、喰べちやいけない事よ。」

「何だい？ 菓子か？ ——ぢや、面倒だが、顔を洗つて來るとするかな。」

益夫が、階下へ顔を洗ひに降りた間、八千代は、火鉢の火種を掻立て、炭をついだりした——や

姉さんになれといふのならば喜んでなる。けれども、「戀」などといふ言葉を口にしてはいけない。お前はまだ、それほど大人にはなつてゐないのだから——さう云ふ意味を、八千代の言葉の外に聞き取つた幹太郎は、その優しい言葉の前に愈々悶えを深くするより外なかつた。彼は、低く首を垂れて、強く唇を噛みしめた。

「ね、あのお手紙には少し誇張があるのよ。こんな事云つて、生意氣だとお怒りになつちや可厭よ。でも、あなた位の年頃は、よくさういふ誇張をしがちなものなの。あなたの御心持は、私、本當にうれしいの。でも、戀なんて、あなた、少しをかしいわね。一時の氣紛れぢやないこと？ いゝえ、屹度然うだわ。」怒つて呉れ、ば未だしも、全然、問題にはして呉れないのだ。然う思ふと、幹太郎は口惜しかつた。が、激しい恥に叩き伏せられた幹太郎は、物を云ひ返す氣力も無かつた。あな

たは、わからないんだ！ わからないんだ！ 幹太郎は、唯、然う心の中で叫ぶより外無かつた。

「あんたも、感じ易い性質なんだわね。だからいろ／＼と餘計な物思ひをもするのよ——」
餘計な物思ひとは何だい？ ——幹太郎は、肩に手を掛けなければかりにして、その匂やかな頬を自分の顔に摺りつけるやうにして、無益な、むしろ腹立たしい、慰めの言葉を繰返さうとする八千代を、肘で拂ひ除けるやうにして立ちあがつた。そして、

「もういゝんです！ もういゝんです！」

と、叫ぶやうに云ひ乍ら、扉を外へ飛び出してしまった。

あとに残された八千代の顔には、やゝ悲しみを帯びた微笑が漂つてゐた。

「まあ、本當に困つた人だわねえ。」

彼女は、心の中で斯うつぶやいた。

八千代は、今、幹太郎が掛けてゐた窓際の長椅子に身を投げかけて、何といふ事なしにほつと溜息をした。牛込の下宿に、益夫を訪ねて、一時間ばかり雑談をして、それから益夫を誘ひ出して、神樂坂のレストランで晩食を喰べて歸つて来た——唯、それだけの事なのに、彼女もひどく疲れてゐた。

彼女は立ちあがつて、窓を開けた。雨になるかと思つた曇り空は、ところ／＼薄く雲切れがして、そこも知れぬ朧月の影は、仄かな明るみで、天鷲絨のやうに柔かな夜をほかしてゐる。枝もたわわに咲き亂れた花の匂ひは、青葉の匂ひや、温つた土の匂ひを交へて、吐息のやうに重く通つて来る。吐息のやうに——それは春そのものゝ吐息である。はなやかな春は、また惱ましい春だつた。春の心臓は、惱しく鼓動して、それを地上の生物なる人間の心に傳へる。快活で、健康で、豊穰

の生命に恵まれてゐる八千代も、また、惱ましい春の人に外ならなかつた。

塙八千代は、彼女の兄——兄でもあれば同時に父でもあつたやうな、友愛の濃かな兄を失つてからは、この家に来る前まで同居してゐた大塚の方の一人の叔母を外にして別に身寄の者もない淋しい境遇の娘であつたが、その美しさと賢さとの故に、何人からも愛せられてゐた。楽道家といふのではない、どころか、かなり深く物を思ひつめるたちの、胸の底には人一倍の悲しみを湛へてゐるやうな女性ではあつたが、一面、快活な、朗らかに、物に屈託しないところがあつて、不幸な境遇にも、決して、彼女の天真を蝕まれる事無く、その大柄な、四肢ののんびりとした、豊かさと颯やかさとの微妙に調和した美しい肉體は、美しい心と共に、今年二十二の春の盛に花咲いてゐた。里見高等女學校で校中第一の美貌と謳はれた頃から、多くの異性の愛慕の的となつて、云ひ寄られ、誘ひかけられた男の数は十の指にも餘つたが、媚婦的な奔放な一面はありながら、理性と、意志とそして、強い矜持と、しつかりと己れを持して、淫りがはしい近頃の風潮に、假にも染まる氣色は無かつた。理性と、意志と、そして強い矜持——と彼女を、その群り集まる男達の中にあつて、清く守らせたのは、就中、その強い矜持であつた。

彼女は、多くの男達から求愛の手をさしのばされた。求婚の申出を受けた。が、彼女は、自分を

許していゝと思ふ一人の男にも未だぶツつからなかつた。——最近、彼女に激しく思ひを寄せてゐる關口謙三は、此家の主人の岡田博士の愛弟子で、少壯學者として令聞があり、不足のない相手のやうにも思はれるのだが、何となく心に染まぬところがあつて、彼女はまだ、返事をする氣にはなれないのであつた。

『お前のやうにむづかしい事を云つてた日にや、一生經つたつてお嫁になんぞ行けやしないよ。いかげんのところで折合ふ氣にならなきやあ——』
と大塚の叔母は、云つてゐたが、本當にこんな風ぢや、一生結婚なぞしないで了ふ事になるかも知れない。

それはいゝかも知れないわ。一生獨りで暮すのも、さツぱりしていゝかも知れないわ。

彼女はさうも思つて見た。が、さう思ふ事は矢張淋しかつた。

ぢや、私はさうすればいゝのか知ら？

だつてしようもないではないか？ と、一方の心が答へる。

いつそ、思ひ切つて、あの人の申込を承諾して了はうか知ら？ だけさ、あの人は何となくむしが好かないやうなところがあるわ。

そんな問答は、益々彼女の心を悩ましくするばかりであつた。咲き重り、咲き枝垂れた満開の花の物なやましさ。豊穰な青春の、吐口のない物なやましさ。——彼女は、もう一度、ほつと溜息をついた。其時、女中のお峯が扉をあけてのぞき込んで、

『八千代さん。旦那様がお呼びでございますよ。』

『先生が？』

『はい、何か御用ださうで、直ぐお書齋の方へいらッしやるやうにと仰有いました。』

『さう。すぐまゐりますと申上げて下さい。』

然う云ひながら八千代は立ちあがつた。八千代は、道子たちの家庭教師としての外に、岡田博士の講演の整理や、著述の手傳ひなどしてゐるのであつた。多分、さうした用事であらうと思ひながら、八千代は階段を降りて行つた。

或る求婚者

「やあ！」

八千代がはひつて行くと、岡田博士は、懶げな微笑で見迎へて、

「お掛け。」

と、顎で、傍の小卓の前の椅子を指し示しながら、廻轉椅子と共に、くるりと身體を廻した。

「何か御用でございますの？」

「いや、別に用といふのでもない。まあ、お掛け！」と、博士は重ねて促がして、さし向ひに腰掛けた八千代の美しい外出姿を、金縁眼鏡の奥から眼を細めるやうにして打睨めながら、

「今日、何處へ行つたのだね？」

「辻さんのところへ行つてまゐりました。」

八千代は、悪びれずに云つた。

「辻はどうしてるね？」

「別に變りございません。」

「相變らず呑氣なんだらうね。」

「え。」八千代は笑ひながら云つた。

「著述の方は、どうだね。進行してゐるやうですか？」

「いゝえ、一向——何だか、ほんやりしていらつしやいました。」

「はゝゝゝ。あの男はいつもほんやりしてゐる。頭は大へんいらしいが——馬鹿なんだか、惻口

なんだか、あの男ばかりは判らん！」

「えゝ。本當に——でも、いゝ人で御座いますわ。」

「八千代さんは、あの男が好きかね？」

博士は、新しい葉巻の口をナイフで切りながら云つた。博士は、もうかれこれ五十歳になつてゐる筈だが、そして、鬢にも髭にも、いくらか白いものが混りはじめてゐたが、中肉中ぜいのがツしりとした身體つきと云ひ、血色のいゝ顔と云ひ、未だ何處にも老いの蝕みは見られなかつた。濃い一文字の眉、短く剃り揃へた口髭、険しいまでに高い鼻と、鋭い眼と——いかにも精悍な男性美は、學者といふよりも、むしろ軍人のやうな、然り、岡田博士と云はうよりは、むしろ岡田將軍とでも

云ひ度いやうな印象を與へるのであつた。その博士の様子を、八千代は好もしげに打眺めながら、
「ええ。好きで御座いますわ。」
と云つた。

「然うかね？ そんなに八千代さんはあの男が好きかね？」

「あら、先生。そんなに——つてほど、好きなのぢや御座いませんわ。そして、好きつて云つてもそれには種々ございますわ。」

「種々ある？ ぢや、どういふ風に好きなのかな？」

博士は、紫の葉巻の煙を吐きながら、その煙越に「や／＼と笑つた。

「兄さんのやうに——とても申しませうか知ら？」

「兄さんのやうに？ なるほど。ぢや、八千代さん、單刀直入にあんたに御聞きするがね？ あの男は何うかね？ あの關口謙三は？」

「關口さん。あの男、私そんなに嫌ひぢやあございませんけさ、でも、そんなに好きでもございませぬ。」

「嫌ひでもなければ好きでもない、といふと、何とも思つてはゐないといふ事になるのだな。」

「ええ、まあ、さうで御座います。」

「それは困つたな。」

「何故でございます？ 先生。」

「何故、さ聞くのかね？ ——いや、それは聞かんでも、八千代さん判つてゐる筈だがね。」

「判りませんわ、先生。」

八千代は、媚を含んだ眼で、博士を見上げるやうにした。

「あの男は、あんたに結婚の申込をしたさうぢや無いか？」

「ええ。——そんな事、云つていらつしやいましたわ。」

「だから、困る——と、わしは云ふのだがね。」

「あら、何故でございます。先生。」

「さ、八千代はあでやかに笑ひながら、

「あの方が私に結婚のお申込みをなすつたのに、私が生憎、あの方がそんなに好きでない——としたところで、何故困るので御座いませう。あの方が私に結婚のお申込みをなすつた事と、私があの方をそんなに好きでない事とは、まるで關係の無い事なのぢや御座いませんか？」

「は、八千代さんはなかく理窟ッほいな。——だが、折角あの男が、あれほどに熱心なんだから、あんたも好きになつてやつて、結婚してやつたらどうかかな？」

「先生は、それをお望みになりました？」

「良縁では無いか？ とわしは思ふのだよ。關口は、何しろあの通りの秀才なんだし、それに、第一、あんなにまで、あんたに夢中になつてゐるんだし——實はね、先刻まで、こゝで私と話してゐたのだよ。何も彼もわしに打明けて、わしからも話して見て呉れよ、涙をこぼさんばかりにして私に頼むのだよ。」博士は、次第に、眞面目な、熱心な調子になつて、「並大ていの事なら、私は取上げはしないのだが、何しろ、あの通り思ひ詰めて居るのだからね。あの有望な男が、こゝで、失戀の爲めに打ちのめされて、一生を誤るやうな事でもあると、實際惜しいものだからね。兎に角、私からも、ぢや、話して見ようと云つては置いたのだがね。」

「まあ——。」

と、八千代は、嘆息するやうに云つたが、そのまゝ押黙つてうなだれて了つた。

「は、關口の奴、私に飛んだ役目を背負はせ居る。八千代さん、どうだね、あの男の申込みを容れてやつては？ あんたが、どうしても肯いて呉れぬとすると、あの男は一生を棒に振るやうな

事になるかも知れん。そんな事になると、これは、日本の學問思想の上の一大損失といふものだからね。何しろ、あの男のあたまでは惜しいあたまでのだ。わしの學問の後継者は、あの男を措いて外には無いとわしは思つてゐるのだ。そんな事で、あの男がへんな風にぐれ出してもしたら大へんだと、その點を私も心配して居るのだがね。——現に、近頃は、「先生、些とも研究が手につかないといふ風で、どうしたのか？」と私も、今日告白を聞くまでは不思議に思つてゐたのだ。」

「ぢやあ、先生。」

と、八千代は苦しげに笑ひながら云つた。

「あの方のあたまでの爲めに、私は、あの方と結婚しなければならぬって事になるんで御座いますの？」

「は、そんな風に皮肉に云はれちや困るが——併し、あれだけ優秀なあたまでの所有主なら、八千代さんの夫にしたつてはづかしくはないと私は思ふのだがね。」

「でも、あの方、本當に、それほゞ眞面目なんでせうか？」

「眞面目だとも。涙を流さんばかりにして？ 私に頼むのだよ。」

「可厭ですわねえ。私が男なら、そんな事死んだつて他人になんぞ頼みはしませんわ。そんな事を

他人に頼むなんて、恥知らずですわ！ 私、そんな事をなさる方だから、だから、あの方が好きになれないのですわ。」

八千代は、低く抑へたやうな聲で云つた。

「そんな風に云つては、あまり、あの男が可愛さうだよ。なるほど、恥知らずといへば云へるかも知れないが、それも皆、思ひ詰めた戀故なのだからね。」

「でも、私、何だか——。」

「ごうしても、好きになれないと云ふのかね？」

「まあ、もう少し考へさせて頂きますわ。」

「考へて呉れ給へ。私も大學では、點が辛過ぎるといふ評判らしいが、八千代さんも随分點が辛いやうだな。八千代さんにかかつちやどうも大抵の男が落第らしい。はゝゝ。」

博士は笑つた。

「點が辛いなんて、決してそんなわけぢや御座いませんけど、でも、男に女を選ぶ権利があるならば、女にだつて男を選ぶ権利がある筈ですわ。」

「それは然うだね。」

博士は、指先で短い口髭を引張りながら、重くうなづいた。

「先生。外に御用はございませんか？」

八千代は、その話はそれとして切り上げるやうにして斯う博士に尋ねた。

「外には別に無い。が、まあいゝぢやあ無いか。紅茶でも淹れさせよう。」

博士は、女中を呼ぶ爲めに、ベルの鈕を押した。

「あら、私、お淹れ致しますわ。」

八千代は、椅子から立ちあがつた。

「いや、あんたがしないでも——。」

と、博士は押禁めたが、八千代はそれを聞捨てに、部屋を出て行つた。

やがて、八千代は紅茶の器を載せた盆を捧げてはひつて來た。そして、その瓦斯ストーヴに沸つてゐる鐵瓶の湯を紅茶瓶に移すと、器用な手附で一碗の甘い熱い飲料をつくつて、博士の前に差し出した。

「やあ、ありがたう。あんたもおあがり。」

「えゝ。私も頂きます。」

博士は、紅茶の碗を口もとにもつて行きながら、

「八千代さん！」

と呼びかけた。

「何でございますの？」

八千代は、長い細い指先で、銀の匙を動かしながら、上目づかひに博士の顔を見上げた。

「あなたは今夜は——」

博士は、若者の様にすこし顔を赤めて、

「大へん、美しく見えるなあ。」

「あら、先生。先生までがそんな事仰つておからかひになつて——」

八千代は、一寸身體をくねらせるやうにして、媚を含んだ眼で博士を見上げた。實際、今夜の八千代は、はでな外出着のせもあるが、その姿態なり、表情なりが、いつもより一層活々として、一舉一動に溢れる自からなる媚めきは、爛熟した處女美の、たとへば露を振りこぼす一朶の花をおもはせるものがあつた。

大學の講座が忙しくならぬ前に、保養がてら、すこし著述の方の仕事もあつて、博士が行きつけの伊豆の温泉に出かけて行つたのは、それから三四日経つて、庭の櫻も、大方散り盡した頃であつた。

主の居ない博士の家は、しとくと降り續く暮春の雨に、とりわけしめやかに明け暮れた。

幹太郎は、學校から歸ると、自分の部屋に閉ぢ籠つて陰鬱に考へ込んでゐた。宮子が、それを心

配して、

「兄さん！」と物問ひ度げに傍に寄つて行つたりすると、幹太郎は、唯、うるささうに眉を擡めて、

左右に首を振るだけであつた。

本當に、兄さんは此頃どうしたのだらう？ どうしてあんなに邪慳にばかりなさるのだらう？

と宮子は一人で小さな胸を痛めるのであつた。この少女が、一つ年上の従兄に對して抱いてゐる感情を、直に戀と云ふのは、蜜を指して直ちに花といふにも等しからう。彼女の春は未だ淺かつた。が、その未だ堅い蜜の裡にも、濃かな色が秘められてゐた。宮子のやさしい心には、此頃、ひどく氣むづかしくなつて、まるで自分をうけつけて呉れない幹太郎が恨めしかつた。さうして、自分はそんなにあの人の氣に入らないのだらうと思ふと、たまらなく悲しかつた。

八千代が、自分の部屋で、今朝から読みかけてゐる新しい佛蘭西の小説の譯本——それは、あの「ジャン・クリストフ」の作者が、二人の處女を主人公として、本當に眼覺めた女性の、多難な行路を描いた新作長篇の第一部であつたが、それを讀み耽つてゐると、そこへ宮子が、しよんほりと力無げな様子ではひつて來た。

「あら、宮子さん！」

八千代は、靜かに本を閉ちて、疲れた眼に柔かな微笑を浮べて宮子を見やつた。

宮子は、黙つて八千代の傍に坐つた。睫毛がふるへて、眼には涙が溜つてゐる。

「どうしたの？ 宮子さん！」

「ひどいんですもの、あの人！」

宮子は、抑へつけたやうな聲で云つたが、涙がほろりとその肌理のこまかな頬にこぼれた。

「何人が——？」

「お前見たいな馬鹿は無いなんで——どうせ私、馬鹿なんですけど、そんなに云はないッたつていいわ！ 兄さん。此頃どうかしてるのよ。」

宮子は、強ひて笑はうとしたが、不隨意に引きつった口もとの筋肉が泣顔をつつてしまつた。

涙が、ぱら／＼と止め度もなく落ちた。

「あら、また幹ちゃんと喧嘩したの？」

八千代は、氣輕な調子で云つたが、矢張笑へなかつた。

「いゝえ。私、喧嘩なんかしやしない。兄さんが、めちやくちやな事を云つて私をいぢめるのよ。」

「どんな事云ふの？」

「馬鹿だ！ 馬鹿だ！ つて云ふのよ。お前見たいな奴、顔を見るのも可厭だなんて、それはひどい事を云つて私をいぢめるのよ。」

「まあ、そんな事を云ふの？」

「兄さん、此頃何うかしてゐるのよ。」

「頭の工合が、悪いのよ。屹度——」

八千代はこんな風に云ふより外無かつた。

「それも、然うですけど、兄さんは、私がお嫌ひなのよ。」

宮子は、力無げに云つた。十六と云ふ年齢にしては無邪氣過ぎる宮子は、まだ自分の戀をはつきり戀だとは自覺しなかつた。従つて、戀の苦みを包む事をも知らなかつた。

「そんな事は無いわ。宮子さんのやうな人、何人だつて嫌ひなどしやしませんわ。」
「兄さんはね。八千代さん。あなたが好きなのよ。あなたばかりが好きなのよ。」
「あら、そんな事無いのよ。」

八千代は、いくらか赤くなりながら云つた。

「いゝえ。さうなのだけ。私、判つてゐるわ。」

宮子は強く云ひ張つたが、しかし、その爲めに、八千代に敵意をもつてゐるといふ風では無かつた。

「まあ、大變！でもそんな事無いのよ。」

八千代は、はぐらかすやうに云つたが、言葉は妙に重く滯つた。

八千代は、此の少女の悲みをいぢらしいものに思ひながらも、どう云つて慰めていゝかわからなかつた。

強ひて話題を他へ移すやうにして、二語三語話してゐると、ばた／＼と足音を立てて走つて來た道子が、障子の蔭から顔をさし入れて、

「あら、宮子さん。こゝにいらしたの？ 八千代さん。お客様よ。關口さんよ。」

「關口さん？」

「えゝ、關口さんが八千代さんにお目にかゝり度いんですつて。もう先刻から來ていらしたつての。私達のお部屋でラヂオを聴いていらつしやるのよ。」

「やゝ？」

八千代は一寸當惑さうにしたが、宮子が道子に誘はれて出て行くあとについて部屋を出た。

道子たちの遊び部屋で幹太郎と同じ卓子に對ひ合つて、ラヂオを聴いてゐた關口謙三は、その部屋の入口に八千代の姿を認めると、聴取器を耳から外して立ちあがつた。

八千代は、一寸眼で合圖をするやうにして、謙三を應接間の方に導いた。

「よく降りますねえ。」

「えゝ。ほんとに。」

八千代は、にこりともせず云つた。

黒ツほい色の背廣をすらりとした長身に恰好よく着た謙三は、細面の額の廣い、神經質らしい容貌をしてゐた。眉が薄く、髭が無いので、その色白の顔がひどくつぺりとした感じはしたが、金縁の近眼鏡の底の、切長の眼には、いかにも學徒らしい理智的な輝きが見られた。が、今日の彼は

見たところ、あのいつもの落着を失つて、ひどくそはそはしてゐた。

「先生は、修善寺にいらしたさうですね。昨日、あちらから葉書を頂きました。」

「然うで御座いますか？ 此方へは今朝、お消息がありました。都合によつて、私、あちらへ御手傳ひにあがる事になるかも知れませんの。」

「然うですか？ もう、すぐにいらつしやるんですか？」

「いゝえ。すぐといふわけではございませんの。それに、未だはつきりと行く事に定つてゐるわけでは無いんですの。」

「八千代さんのやうな素晴らしい助手があるから先生はあんな立派な論文が書けるのですよ。先生は、本當にうらやましいですね。」

「助手つたところで、唯、原稿の御清書をするだけなんですのよ。何でもないので。」

「兎に角、先生は幸福ですよ。」

謙三は八千代の顔を見ながら媚びるやうに笑つたが、やがて、調子を改めて、

「ところで、八千代さん、あなたからの御返事は何時聞かして頂けるのでせうね。」

「あら、またその御催促？」

「だつて、もう可加減で、決心がおつきになりさうなものぢやありませんか？」

「でも、もう少し考へさせて頂戴。」

「もう少し、もう少し——つて、幾度ももう少しが繰返されるでせう？ そんなに焦らさないでもい

いぢや無いですか？」

「別に焦らすなんて、そんなつもりは無いんですけさ、本當に私、どうしていゝか未だわからないんですの。」

八千代は項を伏せて思ひ沈むやうにした。

「ね、八千代さん。後生だから、どうぞ僕の此の心を受け入れて下さい。僕は今まで學問の外に、

眞理の外に、此の人生に求むるものがあるのを知らない人間だつたのです。それが何うしたのか？

あなたといふ人を知つてから、僕の前には、今まで知らなかつた、まるで別の世界が開けたのです。

戀などといふものを、僕は寧ろ輕蔑してゐたのです。僕の辭書には、「戀」などといふものは無い

筈だ——さう思つてゐたのです。それが何うしたのか？ あなたといふ人を知つてから——」

謙三は、突肘をした兩掌で頭を抱へ込むやうにして、熱い息を卓の面へ吐きつけながら、こんな風に云ひ續けるのであつた。

まあ、何て野暮臭い戀の告白だらう？ まるで講義のやうだわ！ と、八千代はそのぎごちない言ひ方を笑止らしく聞きながらも、しかし、それだけに、強く心を撃つ何ものかを、そこに聞きとらずにはゐられなかつた。此の人の云ふ事はうそでは無いわ！ 本當に此の人は私を愛してゐて呉れるのだわ！

「僕はね、八千代さん、甚だ月並な云ひ草かも知れませんが、あなた無しには生きて行けない氣持になつてゐるのです。學問も研究も、此の願ひがかなはなければ、もう何も彼も滅茶々々です。ね、八千代さん、僕の死活は、あなたの返事一つで済まるのです。」

謙三は、一生懸命に云ひ續けた。云ひ終つて、ちらと見上げた眼には、薄く涙さへ溜つてゐる。すぐれた秀才と世に謳はれて、眞理に仕ふる者の矜りを冷かに持してゐた此の人が、今や自分の前に一片の情を乞ふみぢめな心の乞食でしか無いのだと思ふと、八千代は内心にある驕りを感じずにはゐられなかつたが、同時に、もう、笑止といふやうな、突離して見る心の餘裕は失はれて、否應なくその情熱の嵐に捲き込まれて了ひさうになつた。

「そんなに思つていたゞいて、本當に勿體ないくらゐで御座いますわ。」

八千代は溜息まじりに斯う云つたが、しかし、そのまゝ一時の感激に溺れて了ふには、あまりに

彼女の理性が働き過ぎてゐた。彼女は、なだめるやうな調子で續けた。

「ぢや、斯うして下さいました。あと二三日、二三日、お待ち下さいました。二三日経つたら、私屹度はずきりとお返事致しますわ。」

「二三日。——二三日などと曖昧な事にしないで、ぢや、二日。二日のうちに御返事をきかして下さい。」

「二日？ いゝえ、二日で無く三日。三日といふ事にして下さいました。」

八千代は苦しげに笑ひながら云つた。

「ぢや、三日。三日経てば屹度返事をして下さいますね。もう、「もう少し——」などとは、屹度おツしやらないでせうね。」

「えゝ。今度は云ひませんから——」
然う話が進まると、二人とも、もう此上に別の話題に移る氣にもなれなかつた。謙三は、
「ぢや、僕はこれで失禮します。」

と云つて、ついと椅子から離れた。
謙三を送り出す爲めに、扉を開いた時、八千代は、開かれた扉に弾かれたやうに、よろ／＼と二

三歩よろめいて、ちつと此方を睨むやうにして立つてゐる幹太郎の姿を、灯をつけ忘れた廊下の薄暗がりの中に認めた。

『まあ、幹ちゃん！』

八千代は、思はず聲を立てた。

『やあ、幹太郎君。』

謙三も、聲をかけた。

が、幹太郎は、底深く燃える二つの眼で、二人の顔を、じろりと見くらべるやうにすると、一言も言はずにくるりとあちらを向いて、逃げるやうに階段を走り降りた。

エロスの戯れ

謙三に約束の三日の期限は、あと一日に迫つたが、八千代は、矢張、未だ決心がつき兼ねて居た。物質的にこそ恵まれてゐないが、人並すぐれた才能を賦へられた前途有望な青年學者——關口謙三は、夫としてさう不足な男とは思はれない。それにあのやうにまで、深い愛を自分に寄せてゐるのである。もし、自分が彼の求めをしりぞけたならば、本當に彼は可惜その才能を泥土に埋めて了ふやうな事になるかも知れない——と思ふと、八千代は、諸の返事を與へる可く、此の上考慮の餘地の無いやうな氣がした。が、さう決心して見ると、何かまた、心に染まぬ氣がして來て、思ひ切り悪く、思ひ返されるのであつた。

とつおいつの末に、相談相手になつて貰はうと思つて、辻の下宿を訪ねて見たが、生憎益夫は二三日前から旅行に出て、何處へ行つたのか、何時歸るか、まるでわからないのであつた。八千代は、明日は返事をしなければならぬその前夜になつても、矢張、未だどちらとも決め兼ねてゐた。

が、その夜の、夜更になつて修善寺のK館に滞在してゐる博士から、すぐに來いといふ電報が來

た。その電報が、彼女に一時のがれの便宜をもたらした。

あくる日の早朝に、八千代は身支度もそこ／＼に修善寺に向つて發つた。發ち際に、謙三へ手紙を書いて、もし今日彼が訪ねて來たらば渡して呉れるやうにと女中に頼んで置いた。——私は、先生からの電報で今朝とり急ぎ修善寺にまゐります。多分四五日で御手傳はすむ事と思ひます。あの御返事は、いづれ歸つてから口づから申上げます。そんな意味を、その手紙に認めて。

八千代が修善寺のK館に着いたのは、午後一時頃であつた。K館の裏手の、山裾の傾斜に寄せかけられて、別棟に建てられた三間ばかりの室は、爽かな緑を縁にも窓にも揺らがせて、山莊めいた静かさをもつてゐた。毎年、二三度宛はこゝにやつて來る博士は、主人の特別の好意により、いつも、此の棟を臨時の書齋として占領し、思索と執筆とに専念してゐるのであつた。

八千代が女中に案内されて長い渡り廊下を傳つて、その部屋に姿を現はすと、

「やあ、よく來て呉れたねえ。」

と、博士は心から喜んで、

「こんなに早く來て呉れるだらうとは思はなかつた。」

「昨晚、おそく電報が着きましたので、今朝八時の汽車で東京を發つてまゐりました。」

八千代は、美しい血の色のほんのりと浮んだ頬を、半巾で扇ぐやうにしながら云つた。

「御苦勞でした。まあ、一風呂浴びておいで。」

「もう、ずゐ分熱う御座いますわね。私、こんなに汗になつてしまつて——」

「一風呂はひるささツぱりとするよ。」

「ぢや、いたゞいてまゐります。」

八千代は、次の間に立つと、女中が持つて來て呉れた浴衣に着かへて、廊下傳ひに浴室の方へ出て行つた。

石で疊んだ、廣々とした明るい浴室には、何人もゐなかつた。窓の硝子越しに、青葉を透く日ざしが浴槽の面に落ちて、波々と湛へられた湯がエメラルド色に澄み渡つた中に、八千代は、その節々がのすんなりと延びた豊かな四肢を打浸した。女學校時代に、テニスの選手などになつた事もある八千代は、運動のおかげで、申分なく健かな、名工の手になつた彫刻のやうに均齊のよくとれた立派な體格をもつてゐた。首筋から胸にかけての、翳かながらに張り切つた線は、豊かに盛れあがつて二つの乳房となり、更に、デリケートな同時に放膽な曲線を、細くくゞれた腰脚と、すらりと延びた下肢とにかけて滑らかに刻み出してゐる。その、大理石に血脈を通はしたやうな雪白の裸身が、

浴槽の縁に預けられた後頭部と、兩側にさし延ばされた兩手とで、やゝ恣な姿勢をとつた時、それは、正に波の上に起ちあがらうとするヴィナスの姿だつた。

彼女は、兩手で湯の面を叩いて見たり、のほせほてる頬に無意識に手拭を持つて行つたりして、ひた／＼と媚びまつはるやうな温泉の觸感をたのしみながら、ふと、今日、此方へ來る汽車の中で級の友との邂逅を思ひ出した。

汽車が大船を出てから間もなくだつた。

「塙さん！」

と、突然に呼びかけられて、眼をあげるとけばけばしい洋装の女が、にこやかに笑ひながら、自分の前に立つてゐた。

「塙さん。まあ、私をお忘れになつたの。」

重ねて然う云はれてはじめて、それが女學校時代の同窓の津山園枝であつた事に氣がついたのであつた。

「まあ、津山さんでしたの。すっかりお見それして了つて、本當にしばらくでしたわねえ。」

「本當にしばらく。あなたには、あれ以來、あれ以來、あの卒業式の時以來はじめて、お會ひしたのね。」

園枝は、八千代の傍に寄添ふやうに坐つて、懐かしげに云つた。

「丁度、五年振ね。でも、あなたのお噂は、初中終うかがつて居りましたわ。」

「おはづかしい事ばかりだわ。」

園枝は、苦笑ひしながら云つた。

園枝は、未だ女學校に在學してゐるうちから、聲樂家としての有望な前途に囑望されてゐたが、卒業後めき／＼と世間に入り出して、ソプラノの歌ひ手として、輝かしい名を謳はれるやうになつた。が、作曲家の澤井孝策と戀ひしあつて、澤井をして妻子を捨てしめた上、またその澤井を捨て、別の若いヴァイオリストに走つたりして、そんな事の爲めに度々、新聞の社會面を賑はしたりするうち、次第に藝術も荒んで行つて、昨年頃から淺草あたりの低級なオペラなどにも出てゐたやうだつたが、今は、どうしてゐるのか、世間の噂もばつたり絶えてゐた。

「今、どうしていらつしやるの？」

さう八千代が聞くと、

「もう、私なんか駄目よ。」

と、首を振つて、

『塙さんは、些とも前とお變りにならないのね。』

『あなただつて、お變りにならないわ。』

『いゝえ、私はもう駄目。』

美しく化粧はしてゐたけれど、激しい愛慾の名残を見せて、ひどく荒んだ園枝の容貌には、回復し難い疲れが見てとられた。時々、手巾を口もとに當て、力無い咳をしたりするのは、どうやら胸をでも痛めてゐるらしかつた。

園枝は、大磯で降りたが、別れ際に、八千代は初めて彼女に同伴者があつた事に氣がついた。それは、四十ばかりの、猿のやうに醜い顔をした西洋人だつた。いかにも無遠慮なその様子は、唯の知合や友達では無いらしく、園枝は、その同伴者をひどく八千代の前に耻ぢるやうに見えたのだつた。

その同伴者は、どういふわけかひどく不機嫌らしかつた。硝子玉のやうな眼を大きく剝いて、食肉鳥のやうな聲で何か呶鳴るやうにするその醜い西洋人を小聲でなだめなだめ、耻の爲めに赤らんだ顔をそむけて、挨拶もそこ〜に汽車を降りて行つた園枝の姿を思ひ浮べながら、八千代は、まだ、異性の何人からも、指一本觸れられた事のない、自分の、くもり無い珠のやうな美しい身體

を、いとほしい氣持で打眺めるのであつた。この齡まで、熱い血潮の亂れを抑へて、いしくも童貞の清らかさを保ち來つた自分の身體が、ちつと抱きしめてやりたいまでに、いとほしいものに思はれるのであつた。

本當に、私は未だこれからだわ！ 私の身體は、まだ十五の娘とおんなじにきれいなんだわ。そして、私の生涯もまた全く白紙なんだわ。

八千代は、さう思つて、運命が、その白紙の上にかなる文字を書くであらうかを想像せずにはゐられなかつた。

そして此の想像は、自然、八千代の考へをあゝの熱心な求婚者の方へつれて行つた。そして、まだ決し兼ねてゐる關口謙三への返事が、重く心にのしかゝつて來るのを感じたのであつた。

物思ひは涯も無かつた。八千代は、やがて湯からあがると、さつと化粧をして、離室の部屋に歸つて行つた。

『今日は、私は仕事は休むからね。そのまゝで——その浴衣のまゝでいゝから、まあ、こちらへお出で。』

『えゝ、でも、こんな風をして——』

「何、いゝんだよ。温泉場ぢやみんなそれなんだ。はゝゝ。八千代さん、よく似合ふね。」
 博士は、上機嫌の笑顔で八千代の姿を眺めた。白地の浴衣に重ねた藍がかつた棒縞の丹前を素肌
 に着て、濃い紫の腰紐を締めた八千代の姿は、すつきりとして、しかも何となくまめかし
 かつた。

「まあ！ 先生。」

八千代は襟元を氣にして搔き合せながら笑つた。

「意氣——とでもいふのかな？ なかくいいよ。」

博士は、揶揄ふやうな、また、たのしみ眺めるやうな眼附で、きまり悪く坐つてゐる八千代を打
 眺めた。その眼附のなかに思ひ掛けなくも、或る好色的な表情がちらと動いたのには、しかし八千
 代は氣が附かなかつた。

「あら、先生もずゐ分お口がお悪いわ。」

八千代は、伯父に對する姪、といふほどの心持で甘えるやうに云つた。

やがて、そこへ晚餐の膳部が運ばれて來た。

「久振りで少し飲まう。いや、あんたが來て呉れたんで、私もすつかり氣持が明るくなつた。なに

仕事などは、どうでも、いゝのだよ。もう、大體、片附いたのだ。まあ、三四日、ゆつくり遊んで
 おいで。私も少し骨休めをして行かうと思ふのだ。」博士は、そんな風に云ひながら、杯をとりあ
 けた。

その翌る日、八千代は十枚ばかりの筆耕を命じられたが、それを済ますと、もう別に用は無かつ
 た。態々電報で呼ばれる程の仕事が彼女を待つて居たわけでも無かつた。彼女は一寸拍子抜のけし
 た氣持だつたが、しかし、優しい伯父、と云つた感じのする博士と二人、此の物靜かな温泉宿で、
 晩春の幾日かを暮らす事は、八千代にとつて、かなり楽しかつた。八千代は、或は忠實な侍女のや
 うに、或は無邪氣な娘のやうにして、博士と起居を共にした。博士も、家にゐる時とは打つて變つ
 た、明るい調子で、時には、その重い口から輕口などを云つて、八千代を笑はしたりした。

晩春の雨はきれいにあがつて、八千代が此方へ來てからは美しい晴れの日が續いた。

「八千代さん！ 今日は一つ、あんたと二人で遠乗をやらうぢやあ無いか？」

博士が斯う提議したのは、八千代が來てから二三日経つての或る午後であつた。八千代は喜んで
 同意した。

八千代は、對の大島を清々しく着て、匂やかな薄化粧の頬にはれくもした微笑みを浮かべながら博士と並んで座褥に坐つた。自動車は、新緑に薫る風の中に、軽快な駛走を續けた。八千代は、眼を細めて、そのほてつた頬への冷たい空氣の感觸をたのしみながら、がつしりとした博士の肩に、時々、上半身を投げかけるやうにした。

「本當に氣持が宜うございますのね。斯うして、何處までも走つて行くといふ感じが、何とも云はれず宜う御座いますわね。」

「あゝ。だが、遠乗の愉快さは、矢張、日本ぢや駄目だね。第一、道は悪いし——この邊の道はそれでもまあ、いゝ方だがね。」博士は、アメリカあたりの廣い公園などでの、縦横自在な遠乗の愉快さは、また格別だと話してきかせた。

そして、そんな話のきツかけから、博士は、もう二十幾年前の、文部省の留學生としての最初の洋行の時、倫敦の下宿で心易くなつた美しい巴里娘の話など初めた。

「自動車ぢや無い、馬だつた。私は、よくその娘と、馬へ乗つて出かけたものだつた。親父は、公使館附の武官だつたが、非常に快活な娘でね。生粹の巴里娘で、會話なども非常に機智的でね。」博士は、遠い昔の思ひ出を呼ぶやうな眼附をしながらこんな風に語るのであつた。

「そして、非常な美人で——？」

「うむ。美しい事も美しかつた。私が、歸朝して間もなく、巴里に歸つてある商人と結婚したのださうだが、どうも不幸な結婚らしかつたよ。二年ばかりして離婚したといふ消息があつたがね。是非日本へ行き度いなどと、よく云つて來てゐたが——」

「ぢや、手紙のやりとりは、すつとなすつていらつたのね。」

「うむ。五六年の間は、毎月二三度位は屹度たよりがあつたよ。」

「まあ、ぢや、その巴里の娘さん。先生に、戀してゐたんですわね。」

八千代は、笑ひながら博士の顔を見上げた。眼の前にばつと花の咲いたやうな、あでやかな笑顔だつた。

「いや——いや、決してそんなわけぢや無かつたが。はゝゝ。」

博士は、すこし顔を赤めるやうにして笑つた。

「いゝえ。屹度さうよ。その娘さん、何といふお名前でしたの？」

「マリアンヌ——といふ名だつた。」

「で、先生、今でもその娘さんの事を、お思ひ出しになるのでせう。」

「不思議なものだね。もう生きてゐても——ひよつとすると死んだかも知れないがね、生きてゐても四十過ぎた婆さんの筈だが、私の胸に生きてゐるマリアンヌは、いつまで往つても十九の娘なんだからね。そして、マリアンヌを思ひ出すと、何だ、その——」

と博士は、一寸はにかんだやうにして、

「二十九——わしはその時二十九だつたのだよ。あの二十九の時のわしの氣持が、ちらりとわしの胸に影を射すのだよ。」

「先生。先生は、今までに幾度戀をなすつて？」

「は、は、大變な質問だな。——不幸にして、私には戀といふものゝ經驗が無いのだよ。」

「それはうそですわ。先生のお若い頃には、屹度いろ／＼のロオマンヌがおありになつたに違ひ無いわ。」

八千代は、もう五十近い此の齡になつても未だ多分の男性的魅力を残してゐる博士の壯年時代は屹度、一個の美丈夫であつたに違ひ無いと想像した。その上、非常な秀才ではあり、富の背景はあり——そこに、屹度華やかな一時期があつたに違ひ無いと想像した。

「ところが、何も無いのだ。強ひて思ひ出したのが、今の話の巴里娘の一件だけさ。——何といふ

愚かな事だつたと私は思ふのだ。私は、つまらない野心の爲めに、一生を棒に振つてしまつたよ。學問も名譽も、今のわしには何の慰めでもないのだ。わしは、わしの生涯を顧みて、實に落莫の感に堪へん！」

博士の言葉には、しみ／＼と訴へるやうな調子が籠つてゐた。

八千代は、一寸意外な氣がして、返す言葉もなく押黙つてゐた。

「は、は、つまらぬ愚痴を云つたな。」

と、博士は笑つて、

「だが、今日は非常に愉快だよ。八千代さんと一緒にゐると私も何となく若返つた氣持になる。」

「まあ！」

と、八千代は、聲をあげて笑つた。

その時、博士の手は、八千代の手をとつて、そつと引きよせるやうにした。八千代は、それを單なる愛撫の表示と考へて、別に氣にも掛けないで、博士のなすがまゝに任せてゐた。平素から尊敬と、愛慕とを捧げてゐる博士に、八千代は、すこし甘えを帯びた氣持で信頼してゐた。やさしい伯父に對する姪、といつたやうな心持で。

たが、そつと八千代の手を握つてゐる博士の手は、その時博士の胸に燃えあがつた或る暗い情熱の爲めに慄へてゐた。博士は、珠をのべたやうな眞白な襟脚や、艶々とした束髪のかげからのぞいた耳朶や、二筋三筋のおくれ毛に刷かれてゐる美しい片頬やを、惱ましく打ち眺めながら、自分でも不思議なものにおもはれる時候外れの情熱を、その胸に持てあました。あの十九の巴里娘のマリアンヌをはじめとして、これまでの博士の生涯にちらと横顔を見ただけで博士の傍を過り去つたいろ／＼の女たちの印象が、今眼の前に見る八千代の姿の上に、代る／＼浮んでは消え、浮んでは消えるやうに思はれた。

「八千代さん。」

博士は、妙にかすれたやうな聲で呼びかけた。

「何ですの？ 先生。」

「關口の方、まだ決心がつかないかね。」

「ええ。未だ。」

と、八千代は答へた。

三津の濱へ出て、すこし海岸を散歩して、それからすつと修善寺の宿へ歸る筈だったが、途中で

自動車に故障が出来たりしたので、それを修繕する間、一先づ長岡温泉へ車を停めて、そこで一休みする事にした。が、自動車の故障はなか／＼直らなかつた。歸らうと思へば、別の自動車をやとひさへすれば宜い筈だったが、もう日も暮れ近くなつたので、その温泉旅館に一泊する事を博士が提議した。八千代は、すぐに同意した。

未だ新開地らしい落着無さを何處かに残してゐるその温泉町の、それでも一番静かさうな宿に案内させると、修善寺の宿の方に電話でその旨を告げさせて、二人は、何となく旅らしい気分になつて、やゝ疲れた身體を、奥まつた一室に落着けた。それは、勿論八千代はそんな事には氣がつかなかつたが、ある特殊の二人づれの爲めに、特に用意されたやうな部屋だつた。

八千代より一足先に浴場からあがつて來た博士は、縁先の籐椅子に腰をおろして、紙巻をくゆらしながら、暗い眼を、ぢつと膝の下に落してゐた。そこへ、八千代がはひつて來て、いきなり、迷るやうな笑ひを博士に投げかけた。

「何を笑つてるのかね。八千代さん！」

「ほ／＼。だつて、をかしいんですもの。」

八千代は、濡れ手拭で、口もとを抑へながら、身體をくねらせるやうにして笑ひ續けた。

「何がをかしいのかね？」

「今ね、廊下の曲り角のところで、女中さんがひそ／＼話をしてゐるのを、私、そつと立聴しましたのよ。何を云つてゐるかと思つたら、あの奥様はする分齡が違ふねつて一人が云ふと、一人が、奥様ぢや無い娘だらうツて、娘にしちや少しへんだつて一人が云ふと——は／＼。」

八千代はたまらなく可笑しさうだつた。

「は／＼。つまらん事を云つてゐる。」

「でも、先生、私が先生の奥さんなどに見えるのでせうか？」

「馬鹿な！」

と、博士は苦笑したが、博士の瞳には暗い炎が燃えてゐた。此の娘は、どうして、こんなに魅力的なのだらう？ いや、すこし、魅力的に過ぎる。——博士は、然う心の中でつぶやきながら、その眼は、執拗に、八千代の一舉一動を追うて動くのであつた。

そして八千代の一舉一動は、博士の暗い情熱を——不思議な時候外れの情熱を、堪へ難きまでに煽り立てるのであつた。

過 失 ?

「先生、先刻のお話ねえ。」

と、八千代は、いたづらくした眼で、いくらか酔の出た博士の顔を見上げながら云つた。

「何だね？ 先刻の話つて？」

「来る時、自動車の中でお話になつたでせう。先生の昔話。」

「どんな談だつたかな。」

「あの、佛蘭西の娘さんのお話よ。マリアンヌとか云ひましたね。」

「マリアンヌ？ はてな、そんな話をしたかな？」

博士は態とほけるやうにした。

「あら？」

と、八千代も、態とらしい大袈裟な表情をして、

「あんなに熱心にお話になつたぢやございませんか。」

「さうだつたかな？」

「あら、あんなにおのろけを仰有つたくせに……」

八千代は、滴るやうな媚を見せて、

「そのお話をね、もつと悉しく話して下さいました。」

「もつと悉しくと云つたところで、たゞ、あれだけの事なのだからね。」

「いゝえ。そんな事は無いわ。未だ何かいろ／＼ありさうですわ。」

「いや、何にも無い、——それより、八千代さん、あなたの話を聞き度いな。」

「私の話つて、どんな話？」

「その、つまり、ロオマンズといふやつをだね。」

「あら、私にそんなものがあるもんですか？ あるなら、これからですわ。」

「これから？」

「然うですわ。未だ、これからよ。」

「然うだな？ 未だこれからだな。」

こゝ、博士は、盃を口にもつて行きながら、八千代の顔を眺めて、

「羨ましいいな。私は嫉妬を感じるよ。」

「嫉妬ですつて？」

八千代は圓く眼を睜るやうにして、

「まあ、先生が？ 私に？」

「いや、あなたにぢや無い。あなたのやうな美しい人と、青春の歡びを分かち合ふ事の出来る人達に對してなんだ。わしは、さういふ人達がしみ／＼と羨ましいと思ふね。」

博士は、まはりくどい調子で云つた。

「然うでせうか知ら？ 先生のやうな方が、そんな事をお考へになるかと思ふと、私は不思議な氣が致しますわ。」

「何も不思議な事は無い筈だがね。——いや、私は實にまづい生き方をして來たものだ、此頃になつてつく／＼と思ふのだよ、出来るものなら、私はもう一度やり直し度い。學問とか名譽とか、そんな下らんものに囚はれて、人間らしい樂みを何一つして來なかつた私の生涯の失策は、併し、今はもう悔いても遅いのだ。私はね、今度も、研究論文を整理しながら、實に馬鹿々々しい氣がして來て途中で投げ出したのだよ。私は此頃學問といふものゝ興味をすっかり無くして了つたやうだ

が、私のやうな學問に生きてゐた人間が、學問がつまらなくなつたら一體どうすればいいのだらうね。」

博士の述懐は、次第に獨り言めいた調子になつて行つた。

「屹度、お疲れになつたのですわ。あまり御勉強が過ぎたんで、お疲れになつたんで、それでそんな風にお考へになるのよ。」

「然うだ、疲れたんだが、恐らくこれはもう恢復する時の無い疲勞だらうよ。」

博士は嘆息するやうに云つたが、やがて、

「はゝゝ。」

と笑つて、「つまらない愚痴を八千代さんに聞かしてしまつた。——だが、八千代さんが斯うして居て呉れるので私はどんなに助かるか知れんのだよ。」

「あら！」

「いや、本當だ。あんたが居て呉れるので、わしの心にもいくらかうるほひがつくといふものだ。だが、あんただつて何時まで私の家に居て呉れるわけのものでも無し——」

「いゝえ。先生、私、何時まででも先生のお傍に居りますわ。」八千代は、その刹那の殉情的な

氣持で斯う云つた。此の彼女の尊敬して止まない學者の爲めに、生涯を捧げても惜しくはないといふやうな氣持が、少なくとも、その瞬間だけは、強く彼女の心に動いたのであつた。

「はゝゝ。そんな事を云つたつてそれは駄目だ。駄目な事はわかつてゐる。——だから、私は嫉妬を感じざるを得んのだよ。」博士は、ひどく不器用な調子で云つた。

「どうして駄目ですの？」

八千代は不平さうに云つた。

「どうしてと云つて、そんな事は駄目だ。」

博士は、杯をあけて、ぐいと一息に乾して、

「いつまでも傍に居て呉れなどとそんな慾の深い事は云はん。その代りもう一杯、おあがり！」と、その杯を八千代にさし出した。

「あら、私もういけないのよ、私、先生、もう三つも頂いてゐるのよ。」

「未だ大丈夫だよ。わしだつて弱いのだ。もうこれだけで止める事にするからね。」

「本當に先生も随分赤くおなりになつてよ。もうお止めになつた方がいゝわ。」

「止めるから、もう一つだけ——」

博士は、強ひて杯を八千代の手に把らせた。

「私、苦しいんです。こゝんどこがどき／＼として来て。」

八千代は、片手で、弾力のある膨らみを見せた乳房のあたりを抑へるやうにして、訴へるやうに博士の顔を見た、眼がうるんで、頬がほんのりと染まつて、稍くしどけなく膝前を崩した姿が、寧ろ妖艶さ云ひ度いまでになまめかしく見えた。

「近頃の若い女の人達は、皆酒ぐらゐは飲むのだらう？ たつた、二三杯で、そんなに閉口したりして、どうも八千代さんらしくないな。」

博士は、笑ひながら云つた。

「あら、私、お酒なんか頂いたのは、今夜がはじめてと云つてもいゝんですのよ、本當に、先生は悪い方！」

「まあ、それだけお上り。もうそれきりすゝめはしないから。」

博士も、眞赤に酔つた顔にや／＼と微笑を浮べて云つた。

「ぢや、これだけよ。もう、此上お強ひになつては可厭よ。」

八千代は美しい眉をひそめて、眼をつぶつて、その杯を唇に押しあてた。

「はゝゝゝ。」

博士は、それを見てさも面白さうに笑つた。

漸くその一杯を空にした八千代は、それを博士に戻した。博士は、八千代の酌で波々と注がせた杯をひと息にぐつと呑み乾すと、

「あゝ、酔つた。わしもすつかり酔つてしまつた。」

と云ひながら、立ちあがつて、蹠踉とした足どりで室の外に出て行つた。

博士が出て行つたあと、八千代も立ちあがつて縁端に出て、その籐椅子に腰をおろして、冷たい夜風に熱した頬を吹かせてゐた。斯うした酔の感覚は、八千代には最初の経験だつた。全身の血が急速度で血管の中を駆け回り廻つて、それにつれて種々の想念がとりとめもなく亂舞する。そして、ほんやりとほかされた自意識のなかに、何か知ら、酷く肆まゝなものゝ動きが感じられるのであつた。

しばらくして、荒い足音をたて、戻つて来た博士は、座敷にはひるや否や、ごろりと横になつて

「八千代さん。こゝへお出で！」

と、舌もつれのする聲で云つた。

八千代は、座敷にはひると、博士の枕もとに坐つて、

「先生、お酔ひになつたのね。」

と、上から博士の顔をのぞき込むやうにした。

「あゝ、酔つた。酔つた。八千代さん、枕を——枕を——」

博士は眼を閉ぢて、かう謔言めく調子で云ひながら、八千代の膝に後頭部をすりあけるやうにした。八千代は、両手で博士の肩を抱くやうにして、膝を深く、その白髪を交へた、學問の重みに重さうな頭に枕をさせてやつた。八千代は、駄々ッ兒めいた博士の様子が、何となく可愛いものに思はれた。そして、博士の額を柔かに掌で撫でてやるやうにした。

あくる朝——いや、まだ朝といふには早過ぎる頃、戸の隙からの曉の光が、ほのかに漂ふ暗い室の中で、博士は、同時に酔と眠りとから覺めた。そして、次第にはつきりとなつて來る意識のなかに、とり返しつかない昨夜の過失を思ひ浮べた。

過失? ——さうだ、おれは昨夜は酔く酔つてゐた。何も彼もが、皆酔のさせた過失なのだ。さう博士は苦しい喘ぎに獨言つて見た。が、過失としても、何といふ大きな過失であらう! おゝお

れはとんだ事をしてつた! とりかへしつかない事をしてつた。

博士は、寢床の上におきあがつた。而して、はげしい悔恨に胸を掻き捲るやうにした。

おれは一人の處女の貞操を奪つてしまつた。昨夜のおれは野獸だつた。純潔な處女の肉體を、おれは野獸の牙に噛み裂いてつた。

悪夢のやうな昨夜の事が、おほろけながらはつきりと、はつきりとながらおほろけな不思議な色彩で、描くに忍びない、奇怪な情景をそこに描き浮べた。おゝ! いかにして自分が彼女の拒むものを彼女から奪ひとつたか? いかにして自分が彼女を暴力の下の犠牲にしたか? ——自分が、果して? そんな事をなし得たのか? そんな淺ましい行爲をしたものが果して此の自分であつたのか? あのやうに怖ろしい野獸が、本當に自分のうちに住んでゐたのか? 彼には、それが信じられない氣がした。が、それが、決して一場の悪夢ではなかつた事を證明す可く、争ひがたき肉體的感覺が、未だ彼の手に足に、その痕跡を残してゐるでは無いか? 本當に、おれは何といふ事をしたのだらう? 博士は、その手なり足なりをもぎ離してしまひ度いやうに、自分で自分をずたずたに切りきざんでしまひ度いやうに、思ひ悶えるのであつた。

博士はそこに八千代が寝て居る筈の次の間に聞耳を立てた。襖でたてきられた次の間は、しんと

して物音一つしなかつた。先刻まで、かすかに啜り泣きの聲が聞えたやうに思つたが、あれは空耳であつたらうか？ 兎に角、何も聞えないだけ一層不安だつた。彼女はどんなに怒つてゐるだらう。どんなに悲しんでゐるだらう？

おれは詫びなければならぬ。詫びて許される筈のものでは無いが、兎に角彼女の前にひざまづいて罪を待たねばならない。此の罪の償ひの爲めにはどんな事でもするからどうぞ許して呉れ、然らう云つて詫びるより外は無。だが、おれはどうしてあの娘と顔が合はせられるだらう？

博士は夜が明けるのが怖ろしい氣がした。が、白日の光は用捨無く、博士のおびえをのゝく心に迫つて来た。枕もとは次第にあかるくなつた。もう起き出したらしい女中の、ばたくと廊下を歩く足音がして、戸を繰る音が聞えはじめた。

やがて、博士の室の戸が繰られて、今日も好晴の、明るい朝の日は、さつと枕もとに流れ込んだ時、博士はじつとしてはゐられぬ氣持で起きあがつた。そして、廊下傳ひに宿の入口を出ると、『お早うございます。』

といふ番頭の挨拶を聞き流して、そこにあり合ふ下駄を突っかけて戸外へ出た。朝の光はあまりにまばゆかつた。博士は、土鼠のやうに、そのまばゆい日光を怖れながら、しか

し、宿に戻つて、八千代に顔を合わせる事はより以上に怖ろしかつた。博士は、やうやく朝の活動をはじめたばかりの温泉町を出外れて、濕りを帯びた赤土道を、あてもなく歩いて行つた。早發の自動車が一臺おびやかすやうにその背後を掠めて走り過ぎた。博士は、十分あまりも歩き廻つたが、何時迄も然うしてゐるわけには行かないので、重い歩みを宿の方へ返した。

室へ戻つて見ると、八千代はそこにはゐなかつた。間の襖もひきあけられて、もう寢床も畳まれ、朝の掃除の済んだ室は、きちんととり片づけられてゐた。室の隅の衣桁に懸けられた八千代の着物の媚めかしい色彩が、息苦しく、博士の心を壓迫した。

『どこへ行つたのかね？』

そこへはひつて来た女中に、博士は斯う聞いた。

『あちらで、おぐしをあげていらつしやいます。』
と、女中は答へた。

博士は、渴いた咽喉を朝の茶に濕しながら、おちつき無くそこに坐つてゐたが、しばらくすると化粧道具を片手に提げた八千代が廊下に姿を現はした。

八千代は、そこに博士が居るのを見ると、はつと立ちどまつたが、すぐに氣をとり直したやうにして、はひつて来て、

「お早うございます。」

と、尋常に挨拶した。

「お早う！」

と、博士は錆びついたやうな聲で答へたが、案外、何でも無ささうな八千代の様子が意外な氣がした。と同時に、ほつとした安心を感じた。

八千代は、隣の室の、博士の眼からは襖の蔭になつて見えない隅に身を潜めるやうにして、何かこそ／＼と身の廻りの事をしてゐる様子だつた。顔の合せにくいのは博士ばかりでは無かつた。八千代は、女中が朝飯の膳を運んで來ても、そこから出て來ることはしなかつた。

「御飯を召上つて下さいまし。」

女中が、斯う云ふと、八千代は、

「私、欲しくないの。」

と小さい聲で云つた。宿の浴衣を、自分の着物に着換へて了つた八千代は、闕際にうづくまるや

うにして、ぢつと庭前を眺めてゐるのであつた。

「まあ、さうかなすつたのでございますか？」

「すこし氣分が悪いから、私、止めにします。」

「でも、少しお召上りになつたら——」

女中は重ねてすゝめたが、八千代は、首を振つただけで答へなかつた。

博士は黙々としてゐた。そして、博士も、一寸箸をつけただけで止めてしまつた。

女中は、不思議な二人の様子をそつと眺めくらべるやうにしながら、膳部を引いて行つた。

「先生。」

八千代が斯う呼びかけながら、博士の前に歩み寄つたのは、それからまた、十分ばかりの重い沈黙の後だつた。「お仕度をなさいませ。もう、出かけなければいけませんわ。」

「あゝ、出かけよう。」

博士は斯う云ひながら立ちあがつた。そして、洋服に着換へようとするに、八千代はそつと傍に寄つて来て、その着換への手傳ひをした。いつものやうに、襟飾も結んで呉れた。——眼近に見る八千代の顔は、血色が沈んでひどく青褪めてはゐるが、別に變つた表情も見られなかつた。寧ろ無

表情と云ひ度い位の、固い表情ではあつたが、博士が豫期したやうに、然う、怒つても悲しんでも
ゐないらしかった。

二人は、番頭や女中に門口まで見送られて、そこで自動車に乗つた。

自動車は爽やかな朝風を切つて走り出した——二人は出来るだけ間隔を置くやうにして座席に並
んで掛けたが互ひの視線を避け合つて、ぎこちなく黙り込んでゐた。

『八千代さん！』

博士が、思ひ切つて、はじめて斯う聲をかけたのは、自動車がもう一里近くも走つてからであ
つた。

八千代は、ちらと博士の顔を見た。が、すぐにその眼を膝の上に落した。

『わしは本當に濟まん事をした。わしは——わしは——わしは昨夜、ひどく酔つてゐたのだ。前後
不覺に酔つてゐたのだ。——八千代さん、あなたは嘸わしを怒つてゐるだらうな？』

『怒つてゐますわ。』

『どうぞ、わしを許して呉れ。な、わしは昨夜、本當にどうかしてゐたのだ、わしを——。わしを
許して呉れ。』

「……………」

『わしを許して呉れる事が出来ないだらうか？ 此の罪の償ひに、わしは何でもする。何でもする
から——どうぞ、わしを許して呉れ。』

『許したつて、許さないたつて、もうごうにもなりはしませんわ。』 八千代は冷然として云つた。

『あなたはわしを憎んでゐるだらうな？』

『憎むよりも、怒るよりも、私、おどろいてしまひましたわ。先生が、先生があんな事をなさるな
んて！』

八千代はもう一度ちらとその眼で博士の横顔を掬ふやうにした。その眼は、恨むやうな、詰るや
うな、しかし、いくらか媚びるやうな表情にうるんで、すこし赤らめた頬の色も、惱ましい、恥ら
ひが動いてゐた。

『いや、全く面目ないのだ。私は、實にとんでもない事をしてしまつた。』

『先生は、そんなに後悔していらつしやるの？』

『私が今どんなに苦んでゐるか——』

と、博士は、額に浮いた汗を拭ふやうにして、

「どうぞ、ゆるして呉れ。わしは、どんな償ひでもするから……」

「どんなつぐなひをして下さるおつもり？」

「それは判らん。それはあんたに云つて貰はなければ——」

「そんなつぐなひをして頂いたところで、失はれたものは、もう私に戻つて來はしませんわ。」

八千代は、博士を詰るといふよりは唯、自らなげくといふやなう調子で、斯う小聲でつぶやいた。

「私が悪かつたのだよ、私が悪魔に魅入られたのだ。——わしは、今まで清純な學徒として生きて來た。此の齡になつて、こんな破廉恥な過ちを犯さうとは——私は、私自身に對して先づ面目ない氣がする。」

「破廉恥な過ち？ 然うお思ひになるの？」

「然う思はないで、さう思へばいゝのだらう？」

「過ちを過ちでなくしようとはお思ひにならないの？」

「それが出来るなら？」

「出來ますわ。」

「どうすればいゝのだらう？」

「おわかりにならないの？」

「わからない。」

「そんな事がおわかりにならないの？ ぢや、私に償ひをして下さる事だつて出來ない事になりませわね。」

八千代は、奥深い眼で、じつと博士を見つめるやうにした。

「どうすればいゝのか、わしはそれを考へて貰ひ度いだ。」

「教へてあげませうか。——何でもない事ですわ。——唯！」

「唯？」

「私を愛して下さりさへすればいゝのですわ。」と、八千代は早口に云つた。「本當に私を愛して下さりさへすれば——」

「私は、八千代さん、あんたを愛してゐる。」

「本當に愛していらつしやるので無けりや駄目。」

「本當に、わしは、あんたを愛してゐる。」

「それはうそですわ。本當に愛していらつしやるならば、あんな事はなさらぬ筈だわ。」

「あれは、わしの過ちだ」

「でも、先生ばかりの過ちぢやありませんでした。」

八千代は自分自身に云ひ聞かせるやうな調子で云つた。

「私、あなたばかりを責めようとは思ひませんわ。」

博士は、八千代の言葉の意味を解し兼ねるやうに、まじく／＼と八千代の横顔を打眺めてゐた。

「私も矢張、何かに負けたのですわ、私だつて、そんなねんねえぢや御座いませんわ。守りぬくつもりにさへなれば、どんなにも守れたのだと思ひます。私はおめ／＼と男性の犠牲になるやうな、そんな意氣地無しぢや無い筈ですわ。あれが、先生の過ちなら、同時に私の過ちでもあつたのですわ。」

「然うか？——八千代さんはそんな風に思つて呉れるのか？ だと、わしは助かるのだがね。」

「いゝえ。その時は何も判らなかつたんですの。だから、先生は随分酷い方だと思つたんですけれど、今朝になつてよく考へて見ると、私だつて矢張悪かつたのですわ。先生ばかりお恨みしてはいけないだつて事が、だん／＼判つて來たのですわ。」

「八千代さん、本當にあんたはそんな風に思つて呉れるのか？ ぢや、あんたは、私を——私を憎

んではぬないといふのだな。」

「憎むならば、私は、あなたを憎むよりも私自身を憎みます。——私は、先生にばかり罪を着せようとは思ひません。十五、十六の小娘ぢやございせんから、自分の身に起つた事に對しては、自分で責任を持たなきやならないと思ひます。私、決して先生にばかり責任を負はせようとは思ひません。守らうと思へばどんなにでも、守れたのに——」

八千代は、もう一度それを繰返して、

「先生がお負けになつたと同じやうに、私も矢張負けたのでした。これが罪なら、二人で分擔しなけりやならない罪だと私思ひます。」

「そんな風に云はれると、私は益々面目なくなるのだ。——寧ろ思ひ切り憎んで貰つた方がわたしには却て樂な氣がするのだが。」

「先生、あなたは、本當に私を愛して下さる事はお出来にならない？ 此の過ちを過ちでなくする爲めに、本當に、心から私を愛して下さる事はお出来にならない？」

八千代は、その強い眼でちつと博士の顔を見ながら云つた。

「わしは、八千代さん、あんたを愛してゐる。——だが、わしは、果して、あんたを愛する資格が

あるだらうか？ 私はもう此の通りの老人だ。」

「本當の愛の前に年齢などは問題ぢやございせんわ。」

「八千代さん。あなたのいふ事は酷くわしを面喰はせる。ぢやあなたは、本當に私を——此の私を愛してゐて呉れるといふのだらうか？」

「愛してゐるのかも知れせんわ。」

八千代は、顔を赤くしながら云つた。博士は、つやくとした束髪たすくはつの、二筋三筋のおくれ毛おくれげで刷かれた匂やかな頬ほや、うすい紫色むらさきの半襟はんせきをくつきりと抜け出した白い頸筋くびすぢや、翳なまやかながら肉附にくづのいゝ肩かたやを、眼めに近く眺めながら、二十の若者わかしよのやうな胸騒むなざわぎを感じた。此の若い美しい娘むすめが、本當に、此のわしを愛してゐるといふのか？

その時、自動車じどうしゃがひとゆれ揺れた。そのはずみに、八千代は博士の方に顔を向けて、恥ぢを含んだ微笑わいせうをちらとその奥深い眼めに浮べた。

不 思 議 な 愛 情

——それは八千代にまつても、思ひ掛けない一つの發見はつけんといふ可きだつた。

その、あられも無い出來事できごとの後で、八千代は、遂つひに失はれた處女じよらふの爲ために、悲かなしみも悔くいもした。が、彼女はどうしても、博士はかせを憎にくむ事が出來なかつた。當然憎まなければならぬ筈はずの博士はかせをどうしても、憎む事が出來なかつた。これは我ながら不思議だつた。そして、八千代は、そこに、自分じぶんが博士はかせを愛してゐた事を自覺じかくした。博士はかせに對する日頃ひごろの尊敬そんけいと信賴しんらいとのうちに、處女じよらふを奪うばはれて、なほ、怒り得ない不思議な心持こころもちが、いつの間にか醸いもされてゐた事に彼女は氣がついた。此の不思議な心持こころもち、それが愛で無くて何なんであらう？

八千代は、昨夜けふやの事を思ふと、思はず顔かほが赤くなつた。尊敬そんけいしきつてゐた博士はかせが、むしろ、神聖しんせいなものとして崇拜すうはいしてゐた博士はかせが、あのやうな振舞ふるまひに出ようとは？ それはまことに意外いがいであり、幻滅げんめつ的てきの感じでもあつた。が、それは、彼女かのぢよらふ自身みづかみについても云へる事だつた。なるほど、自分じぶんは拒まみもし防まぎもしたが、自分じぶんは果はして全然受動的ぜんぜんじゆうてきのみあり得たらうか？ いや、今まで博士はかせに對たいす

自分のあまりにもなれ／＼しかつた態度を思ふと、自分から誘惑したとさへ云へさうではないか？ 自分はたしかに、つゝしみを忘れてゐた。甘え過ぎてゐた。老年の博士に對する媚の効果、ひとりひそかに楽しんでゐさへした、博士をあやうな振舞に出でしめた責任は、自分にあるといつてもいいのだ。さうだ。自分はその時、拒みもし防ぎもしたけれど拒む言葉にも、防ぐ手にも力が無かつた。正直に云へば、自分もまたそれを求めてゐたのではなかつたか？

そして、八千代は、今、博士を憎む事が出来ないばかりか、却て、今までよりも一層の思慕が、博士に對して感じられるのであつた、心からの——といふよりも、肉體そのものからの、ある不思議な思慕が、斯うして博士と並んでゐながらも、堪へがたいまでに、潮し寄せて來るのだ。

本當に何て、へんなんだらう——と、八千代は、洋服の羅紗の匂ひと葉卷の匂ひとの交り合つた博士の匂ひを感じながら、心の中で獨言つた。私つて女も、何て妙な女なんだらう？

その時、八千代の眼には、ふと、自分の返事を待つてゐるであらうあの求婚者の顔が——關口謙三の、縋り求めるやうな眼附が、描き浮べられた。同時に、彼女の胸は急に重く暗くなつた。でも、仕方が無いわ！ あの方には、おことわりするより外無いわ！ 八千代は、斯う心の中につぶやいた。

——だけど、私はしてどうすればいいのだらう？ 私は一體どうなるのだらう？

八千代は惱まじげな眼で、そつと博士の顔を偷み見た、博士は、八千代の思ひ掛けない愛の表示で、悔恨と苦惱の深淵から俄かに明るい喜びへと躍りあがつてゐた。——が、しかし、博士は、それがあまりに思ひ掛けなかつたので、まだ本當にそれを信じていゝかどうかを思ひ惑ふといふ風にも見えた。

しかし、八千代の手は何時の間にか博士の手の裡にあつた。自動車が、修善寺の宿に着いたのは、午少し前であつた。

『お歸りなさいませ。』

と、出迎へた女中は、博士に、

『あの、お客様がいらしつて、お待ちでございます。』

と告げた。

『お客様？ 何といふ人だ？』

『關口さんと仰有る方でございます。昨夜いらしつて、すつとお待ちでございます。』

博士は當惑した顔で、八千代を顧みた。折も折とて、工合の悪い來客だつた。

關口謙三がやつて来たのは、八千代から返事を聞く爲めに違ひ無かつた。謙三は、八千代の返事を待ち兼ねて、とう／＼出かけて来たのだ。八千代はそれを知つてゐた。で、彼女の當惑は、博士以上だつた。

「いやですわ、先生。私、あの方に會ひ度くございませんの。」

八千代は、首を振りながら、甘えるやうに云つた。

「だが、會はぬわけにはいかない。」

「でも、私、困るわ。」

八千代は駄々を捏ねるやうに云つた。

「そんな事を云つても仕方がない。」

博士は苦笑しながら、部屋にはいつて行つた。

關口謙三は、宿の浴衣にくつろいだ身體を、藤椅子に投げかけてゐるたが、博士がはいつて行く、慌て、椅子から降りた。

「やあ、やつて来たね。」

博士は、笑ひながら云つた。

「昨日、外山が發ちますので、横濱まで見送りに出たついでにふと思ひ立つてやつてまゐりました。御仕事の御邪魔かと思ひましたが——」

と、關口は慇懃に云つたが、博士の耳にはそれが皮肉の様に聞えた。

「いや、今度はすつかり仕事に興が乗らなくてね。昨日遠乗に出かけたのだが、自動車がパンクしたんで、つい、途中にひつかまつてしまつたのだ。」

博士は辯解するやうに云つた。

「然うでしたか。僕は、丁度、お出掛けになつたすぐあとへやつて来たのでした。もうすこし早ければお伴が出来たのでしたのに。」

「あゝ、惜しい事をした。」

そこへ、一足おくれて八千代がはいつて来た。

「關口さん、いらッしやい。」

八千代は、平氣な顔をして云つたが、表情はひどく混亂してゐた。

「お邪魔にやつて来ましたよ。」

「昨日、いらしつたんですの？」

「えい。」

「昨日からずつとお待ちになつて——退屈なすつたでせう？」

「方々ぶら／＼と散歩して見たりしてゐましたから、さう退屈はしませんでした。はじめての土地ですからね。——昨夜は長岡へおとまりでしたか？」

と、關口は、博士にとも八千代にともなく問うた。

「あゝ、長岡へ一泊した。」

博士は、重苦しく云つた。

「さういふ御電話だつたと女中に訊いたもんですから、餘ッほご長岡まで押しかけて行かうと思つたのですが。」

「いらつしやれば宜かつたわ。」

八千代はさりげ無く云つた。

八千代は次第に落着を取り戻して來た。

「遠乗は愉快だつたでせう？」

關口の言葉には、何となく語るやうな響が籠つてゐた。

「えい。ずゐ分面白う御座いましたわ。」

八千代は反抗的に云つた。

そんな風にして、三人の會話はあたり前の調子で進行して行つたが、何となくしつくりとしな

い、白けた氣持がそこに漂つてゐた。二人の間に何事が起つたか？ 謙三は勿論それを知りようは

無かつたが、しかし、闖入者としての或る間の悪さが謙三の態度をひそくごちないものにした。

博士と謙三との間には昨日留學の途に就いた外山といふ、若い學士の事などが語り出された。外

山は、謙三の友人で、兼ねて辻益夫とも相識の間柄だつた。謙三は、ふと氣がついたやうに、八千

代に云つた。

「昨日、辻君に會ひましたよ、八千代さん。あなたに宜しくつて事でした。」

「然う？ 辻さん、どうしていらつしつて？」

「相變らずでしたよ。」

辻の名を聞くと、八千代は何となく憂鬱になつた。益夫の、優しい眼が、じつと何處かで自分を

見てゐるやうな氣がした。

午飯の後博士と謙三と、碁盤に對つて、しきりに烏鷲を戦はし初めた。八千代は傍でそれを見て

ゐた。

「いや、これはしまつた！」

博士は、大事なところを見落しては、時々、馬鹿々々しい打ちそこなひをした。二度打つて、二度ながら博士の大敗だつた。

「先生。今日はさうかしていらつしやいますねえ。」

謙三は、笑止らしく云つた。

が、三番目に謙三が負けた。四番目にも謙三が負けた。謙三の打ち方もひどく亂れてゐた。どうかしてゐるのは博士ばかりでは無かつた。——實際、謙三には、さうして呑氣に碁など打つてゐる心の餘裕は無いのであつた。謙三は時々、熱ッほく輝く眼で、八千代の方を見た。八千代の素知らぬ風が、一層謙三を苛立たせずには置かなかつた。

謙三は、どうかして八千代と二人だけになつて、約束の返事を八千代から聞き度いと思つた。が、八千代は、謙三の爲めにその機會を作つてやらうとしないばかりか、却つて、二人だけになる事を避けるやうにさへ見えた。

「八千代さん。」

八千代が浴場の方へ出かけて行く後から謙三が斯う呼び留めたのはその日の日暮頃だつた。苛立たしさに前後を忘れたといふ風にして、謙三は、その廊下の途中で八千代に話しかけた。

「八千代さん。僕は、お返事を聞きに來たのですよ。」

謙三の眼は燃えてゐた。

八千代は返事に困つて、深く項を落して立留まつた。

「諾か、否か、たつた一言でいゝのです。」

「あとで申上げますわ。こゝでは——」

と八千代は、前後を見廻すやうにして云つた。

「先生だつて、僕の心持は知つて居られるのです。先生の前でだつて聞かうと思へば聞けたのです。——何處でだつて、唯一言返事をして下さるに、場所なんか構はない筈です。あとでなんて、今度はそんな事は云はない筈だつたぢやありませんか。」

「困るわねえ。」

八千代はつぶやくやうに云つた。

「何が困るのです？」

謙三の調子は、例になく激しかった。

「未だお話しなかつたんですけど、實は、僕、一方に結婚問題が持ちあがつてゐるので、その方の關係からも、はつきりとしたお返事を一刻も早く聞き度いのですよ。どうぞ、あまり焦らさないで下さい。僕は、こんな懸引には全く不慣なんですからね。」

「別に懸引なんてありませんわ。」

「ぢや、はつきりと云つて下さい。」

「ぢや、どうぞ——」

と、八千代は云つた。

「私の事は思ひ切つて下さい。」

「矢張、いけないんですね。」

謙三の顔は、見る／＼青ざめた。

「どうぞ、その一方の結婚のお話をお進め下さるやうにお願いしますわ。」

「それは僕の勝手です。」

「すみません。本當に濟まないと思ひます。」

「濟むも濟まないもありません。あなたが可厭だと仰有るんなら、僕もあきらめるより外ありません。——ですが、八千代さん。それならそれで、何故もつと早く、否と云つては呉れなかつたのでせうね。」

「私、考へてゐたんですわ。」

「だが、僕は、八九分通りは、あなたが承諾して下さると思つてゐた。あなたの様子は、そんな風に見えた——」

謙三は、急に力なく萎れた調子で云つた。

「本當に濟みません。」

八千代は、謙三の前に低く頭を下げるやうにした。

「八千代さん。未練らしい事を云ふやうですが、あなたは唯僕が可厭なのですか？ それとも外に僕と結婚して下さる事の出来ない事情があるのですか？」

「可厭といふのでは御座いません。」

「ぢや、外に何か事情があるのですか？ 外に何人か愛してゐる方でもあるのですか？」

「……………」

「せめてそれだけ話して下さい。これだけでもあなたから聞いておけば、僕もあきらめいゝのですから。」

「どうぞ、許して下さい。私は、もう、あなたの想像していらつしやるやうな純潔な娘ではないのでございます。」

「然うですか？ それは知りませんでした。」

「私と結婚して下さつても、あなたは決してお幸せにはなれないと思ひますから——」

「あなたは、ぢや、他の何人かを愛していらつしやるんですね？」

八千代はうなづくでもなく、うなづかぬでもなく低く頭を垂れた。

「何人でせうね？ あなたが愛してゐるといふ人は？」

謙三は嫉みの炎を底に隠したなやましげな眼で、八千代の顔をのぞき込むやうにした。

「どうぞ、そんな事をお聞きにならないで。」

八千代は、さういつて頭を振つたが、背後の方でする足音に、謙三が一寸身を退くやうにしたのを機会に、

「御免下さいませ。」

と云ひすて、逃げるやうに謙三の傍を離れた。

二三分の後、八千代が浴場から戻つて来て見ると、謙三はすっかり洋服に着換へて、もう發つ

ばかりに支度をしてゐた。

「おや！ お歸りになりますの？」

「ええ。」

謙三は、むつとりとして云つた。

「關口君は、さうしても今夜歸るといふのだがね。」

博士も、白けた調子で、

「ねえ、どうしても歸らにやならんのかい？」

と、後半を謙三に向つて云つた。

「ええ。一寸都合が御座いますから。」

謙三は、片意地に云つた。

「わし達も、明日か明後日は歸るつもりなのだがね。」

博士は云ひわけらしく云つて、

「もう一日二日遊んでゐてもよからうになあ。」

「いゝえ。然うしては居られませんから。」

と、謙三は飽迄も強情に云ひ張つて、聽て、別れを告げて立つた。博士も八千代も宿の入口まで見送りに出た。

謙三を見送つて座敷に戻ると、博士は、妙に憂鬱な、暗い顔附をして、ほんやりと何か考へ込むやうにした。

「先生、何を考へていらつしやるの？」

「關口に、ことわつたのだらう？」

「えゝ。」

「彼の男も氣の毒だな。」

「でも、仕方ありませんわ。」

「わしは、八千代さん、あなたに、濟まん氣がしてならん！」

「そんな事仰有つちやいけません。」

「あなたの生涯の幸福を臺無しにしてしまつたやうだね？」

「あの人と結婚する事がそんなに幸福とは思はれませんわ。」

「わしを許して呉れるかい？ 八千代さん。」

「先生は、割に氣がお弱いのね。」

八千代は、いくらか濕ッほい眼附をしてゐたが、その顔には、甘えの表情があつた、それは今までの八千代の、無邪氣な甘えではなかつた。何さなく物惱ましげな、それ故に一層魅力のある媚びであつた。

「だが、八千代さん。あなたも妙な娘だねえ。」

「えゝ、私、自分でもさう思ひますわ。私、自分で自分の心持が不思議に思へてなりませんの。私本當にどうかしてゐるのかも知れませんか。」

「さう云へば、此のわしだつてどうかしてゐるのだよ。」

「困りものね。」

「困りものだ。はゝゝ。」

と、博士は空虚な聲をあげて笑つた。

黄昏の花

いつも朝寝坊の益夫が、今朝は七時といふのに床を離れた。そして顔を洗ふと、朝食も食べないで外出の支度をした。支度と云つても、たった一着しかない背廣の、もう大分皺になつた奴に、ボヘミアン・ネクタイを無造作に結んだだけだつた。せめて髻だけでも剃つて置かうと、彼は安全剃刀をとり出して、水もつけないでごし／＼とやりはじめた。

「あら、辻さん、もうお起きになつたの？ 朝からおめかしして、何處かへお出掛け？」
そこへはひつて来た女中はからかふやうに云つた。

「うん」

益夫は、唇を押し曲けながら云つた。

「どちらへお出掛け？ こんなに早くから。」

「東京ステイションまで。」

「何人かお迎へ？」

「うん。——郷里から人が来るんだ。」

「さう？ どなた？」

「何人だか當てゝ見給へ。」

「男の人？ 女の人？」

「男と、女さ。」

「たゞ、男と女とだけぢや判らないわ。」女中は一寸考へるやうにしたが、「判つたわ。屹度、此間の寫眞の人なんでせう。ね、あの綺麗な娘さん。あの娘さんが郷里から訪ねて来るんでせう？ それで、髻を剃つたりしておめかししてゐるのね。」

「う、う——」

と、益夫は、圖星を指されたので、稍々うろたへ氣味に口籠つた。

「あの娘さん、あなたのお嫁さんになる方なんでせう？」

女中はごむ毬のやうな頬を笑ひに崩しながら云つた。此の茶目の女中は、多くの下宿人の中でも、益夫にはとりわけある好奇心をもつてゐるらしかつた。

「そんなわけぢや無いさ。」

「隠したつて駄目よ。私、ちやあんと知つてるんだから——だけど、辻さん、もう一人の人ね。あの方の方は、ぢや何うするの？」

「もう一人つて、何人の事だい？」

「あの呆けた顔つたら！ よくこゝへ訪ねて来る別嬪さんよ。近頃はあまり見えないやうだけど、せんのうちは、よく来たぢやないの？」

それは勿論八千代の事だつた。益夫の顔をさつと暗い翳が通り過ぎた。

「私は、はじめ、あの方があなたの奥さんになる人かと思つたわよ。」

「然うかな？ そんな風に見えたかな？」

益夫は淋しく笑ひ乍ら云つた。

「えゝ。さう見えたわ。おかみさんなどはもうそれに定めてゐたわ。辻さんの御許嫁の方は何てすてきなんだらう？ 辻さんは本當に、へんぶく家でいらつしやるなんて。」

「へんぶく家か？ なるほど。」

と益夫は思はず笑ひ出して、

「へんぶく家で、さうして、へんくつ屋でいらつしやる。はゝゝ。」

「何がをかしいの？ ね、寫眞の娘さんもきれいだけど、あの何とか云つたわね、さうく、八千代さんて方はとてもすごいわ。活動の松井千枝子ね、あれにそっくりで、あれよりも少しきれいだわ。」

「松井千枝子つて、活動女優かい？ おれは活動つてもものを見た事がないから、そんな人は知らないな。」

「でも、あの人屹度怒つてよ。その娘さんとあの八千代さんて方と、屹度三角關係つて事になつてよ。」

「三角關係なんて、生意氣な事を知つてるね。君は。」

「いくら女中だつて、三角關係ぐらゐは知つてるわよ。」

「裏二階にゐる大學生にでも教はつたな。はゝゝ。」

「教はらなくてもその位の事は知つてるわ。屹度、三角關係の悲劇つて事になるわ。何故つて、あの八千代さんて人、あんなにあなたを愛してゐるんですもの。」

女中は、したり顔に云つた。

「さう見えるかい？」

『見えますとも——。愛してゐるのでなきや、あんな風に度々訪ねて來たり何かしやしないわ。』
『でも、此頃は些とも來ないぢや無いか？』

益夫は他事のやうに云つた。が、その時益夫の剃刀を持つた手が波を打つてふるへた。そして、剃刀の刃がひつかゝつて右の頬に赤く血がにじみ出した。

『あら！ 顔が切れたわ！』

女中は、顔色を變へて大業に叫んだ。

『しまつた。少し切つたね。』

益夫は、傷の上を片手で抑へると、

『はゝゝ！』

と、空虚な聲で笑つた。

兎に角、髻を剃つてしまふと、益夫はふらりと下宿を出た。時計を見ると、もう八時近かつた。八時二十分ので着く事になつてゐるので愚圖々々してはゐられ無かつた。彼は、筑土八幡前で萬世橋行の電車に乗つた。むらがり起るいろ／＼の想念が彼の心を掻き亂した。七月の朝は青く晴れてゐた。が、彼の氣持はうつたうしくもつてゐた。

益夫が今迎へに行かうとする郷里からの客といふのは、伯父と、その養女の小夜子であつた。

小夜子事氣鬱症の氣味にて日々物思はしけに閉籠り居り——といふやうな古風な調子で、伯父は益夫への手紙に書いて來た。實子といふものの無い伯父は、養女の小夜子を掌中の珠といつくしんでゐた。伯母が亡くなつてからはその愛は一層だつた。去年の春、久振で歸省した時、益夫は、靜かな城下町の、ひつせりとした大きな家に、七十に近い伯父と、十八になつた小夜子とが、つましやかに暮らしてゐるのを見た。伯父は、玉の大きな老眼鏡を鼻の尖まですり下けて、しきりに古書を読んでゐた。町の女學校を卒業したばかりの小夜子は、いつの間にか「ねよげに見える」若草の風情に生ひ立つて、耻らひ深く白いうなじを伏せてゐた。

『小夜。辻の兄さんに一つ聞かせてあげろ。』

幾度も伯父にうながされて、小夜子は琴を弾いた。ロオレイを口ずさむすらもう古い世に、琴を弾く娘は、どちらかといへば尙古主義の益夫にさへ時代錯誤の思ひをさせた。しかし、二十五段の清搔には、ヴァイオリンやピアノの音に知られぬメラコンニクな情趣があつた。益夫は、此の義理の従妹の、黄昏の花のやうな姿をあはれ深く眺めた。あはれ深く眺めると共に、淡い愛情を胸に感じた。

「わしは、これをとうく斯んな娘に育てゝしまつたよ。こんな娘はもう東京には居ないだらうな。だが、わしは、女はこれでいゝのだと思ふが——」

口に出しては云はなかつたが、伯父の眼は益夫に然う語つてゐた。伯父の眼が、益夫に語つたのは、そればかりでは無かつた。

まだ伯母が存生の頃、伯母は、小夜子と益夫との未来にある希望をつないでゐた。伯母がある時こんな風に口をすべらしたのを、益夫は聞いて覚えてゐる。「益夫さんと小夜子とは、一廻り近く年齢が違ふけれど、そのくらゐは構はないだらう。従兄妹同志は、近親結婚とやら云つていけないさうだが、従兄妹は従兄妹でも義理の仲で何も血がつゞいてゐるといふわけでは無いんだからね。」

益夫は、しかし單なる夢語りとしてそれを聞き流してゐた。小夜子はまだ十三四にしかならなかつたし、益夫自身は學問の外に思ふところのない大學生だつたから——

が、その時伯父の眼の中に、益夫は伯母の言葉のつゞきを讀んだ。益夫は平氣ではゐられなかつた。——が、益夫の氣持は、たゞあはれと思ひ、可憐と思ふ以上には伸びて行かなかつた。といふのは、益夫の胸には、もつと色の濃かな、大輪の花が、露を振りこぼしながらゆらめいてゐたからだつた。

「關々たる睚鳩——」

伯父は、こんな文句を口ずさんで、益夫と小夜子とを見くらべたりした。伯父の諷意ははつきり判つたが、益夫はわざと判らぬ風をして東京へ歸つて來た。そして、それからは、一年以上も伯父にも小夜子にも會はないのであつた。伯父は、未だあらはに意中を申出でようとはしなかつたが、十日ばかり前に、小夜子の寫眞を送つて來た。その時寫眞と一緒によこした手紙には、小夜子に婚をとらうと思ふが、そして二三その候補者もあるのだが——といふやうな事が、曖昧な、しかし底意を含んだ調子で書かれてゐた。そして、益夫が、その手紙によつてもたらされた重苦しさを拂ひ兼ねてゐるうちに、第二の手紙が來た。

東京でも見せたら、小夜子の心もすこしは晴々とするかも知れない。わしも久振で東京見物がしたいから、小夜子を伴つて上京する、よろしく頼む。さう、その手紙には書いてあつた。續いて明日朝八時二十分に東京驛に着くといふ電報が、昨夜益夫の許にとゞいたのであつた。

まだ十分間があるつもりで、悠々と驛前で電車を降りた益夫は、停車場へはひつて見て自分の時計が二十分近くおくれてゐたのに氣がついた。停車場の時計は、もう、八時二十分を五分ばかり過ぎてゐた。そして、きつちりその時間に着いた汽車からの客は、騒然と、足音を響かせながら、潮

のやうに改札口に押し寄せてゐた。

益夫は、しまつた！と思つたが、未だ降車客の大部分は改札口の向ふにひしめいてゐたので、一應、待合室を見渡してそれらしい人の姿が見えないのを見定めた上、彼は、同じやうに出迎へらしい人達に交つて、改札口の傍に立つてゐた。

次から次へと改札口を出て来る降車客を、益夫は、熱心に見迎へたが、伯父達の姿は最後まで見出されなかつた。

どうしたのか知ら？ 一汽車遅れたのか知ら？と思ひながら、踵を廻すと、すぐ眼の前に、一雙の明眸が、つゞましやかな笑みを含んで彼を見迎へてゐた。

「あゝ小夜子さん。」

小夜子はぱつと顔を赤くして、黙つて頭を下げた。小夜子の背後から、伯父が、白い顎髭を揺りながら、大きな口を開いて笑つた。

「はゝゝ。矢張、益夫ぢやつた。それに違ひないから、一寸聲をかけて見いと小夜子に云つたのぢやが、もし違ふときまりが悪いからと云つて、小夜子もぢゝとつたんでな。」
「あゝ、さうですか？ お迎へが少しおくれたもんですから。」

と、益夫は辯解するやうに云つて、

「お疲れでしたらう？ 小夜子さん、よく來ましたね。」と、小夜子に笑ひかけた。

黒地に荒い飛白の明石を、ほつそりとした身體にすが／＼しく着た小夜子は、上目づかひにちらと益夫にほゝゑみかけたが、再びぱつと赤くなつて、眼を手にした水色のパラソルの石突のあたりに落した。

「はゝゝ！」

伯父は、その様子を見ると、意味も無く笑つて、

「兎に角、宿へ案内して貰はうか？ わしはよく眠つたが、小夜子は昨夜あまり眠れなんだやうでな。」

益夫は、伯父の手から、スウツケースを受取ると、先に立つて出口の方へ歩いた。そこでタクシイをやとふと、伯父、小夜子、自分といふ順序で乗込んだ。運転手には、昨夜とつておいた九段上の旅館の名を云つた。

伯父にとつても久振の上京であり、小夜子には最初の上京だつた。伯父は窓越しに兩側の光景を眺めながら、震災後の復興の案外早い事などを云つた。

「わしがはじめて東京へ出たのは、憲法發布式の時だったよ。あの日はうつすりと雪が降つてな——」

七十に近づいても元氣な伯父は、機嫌よく、そんな遠い昔を語り出したりして、

「今度は、だが、もうこれきりのつもりで出て来たのぢや。私は、東京もこれで最後のつもりだが、小夜子ははじめてぢや。お前も忙しからうが、一つ、小夜子にゆつくり東京を見せてやつて呉れ。」

「ええ。何處へでも案内しますよ。」

益夫も、伯父の機嫌に引き入れられて、元氣よく斯う云はずにはゐられなかつた。

九段上の宿は、電車の音が少しうるさかつたが、宿そのものは割合に落着いて伯父にも氣に入つたらしなかつた。尤も、伯父は益夫の下宿に案内されるつもりだつたらしく、その點で、一寸不満らしい様子ではあつたが——

宿について、顔を洗ひ直したり、茶を呑んだりしてゐるうちにやがて午だつた。

三人一緒に午飯を済ますと、伯父は、

「小夜子、お前はすこし寝るといい。わしはこゝで益夫さんと話してゐる。お前はあちらで、ゆつくりとやすみするといふ。」

と、しきりに小夜子にすゝめたが、小夜子は眠くは無いと云つた。そして、小夜子に眠る事をすめた伯父の方が却て、そこにござりと横になると、益夫との話のうけごたへも次第に覺束無くなり、やがてすう／＼と寢息を立てはじめた。

「はゝゝ。伯父さん、御自分で眠つて了はれた。」

益夫は、小夜子の顔を見て笑つた。小夜子は眼もただけで笑ひを返した。

小夜子は、窮屈さうに坐つて、膝の上に眼を落したまゝ、一語も口を利かなかつた。益夫もひき手持無沙汰だつた。こんな時、軽く話しかけて、何か面白い話題のなかに打ちくつろぐ事の出来るやうな益夫では無かつた。

「疲れたでせう?」

「いゝえ。」

「伯父さんは相變らず元氣ですね。」

「ええ。」

こんな單純な會話が、長い間を置いて重苦しく取交はされた。會話と云つても、小夜子は、唯、「ええ。」とか「いゝえ。」とか答へるだけで——そして、ともすれば顔をぱつと赤く染めて、やり

ばに困る眼をおどくとさまよはずのであつた。

そのあくる日から、益夫は伯父と小夜子との案内役として、東京名所めぐりをしなければならなかつた。伯父の註文で、先づ第一に明治神宮の参拜。それから二重橋、銀座、上野、浅草といふ風に歩き廻つたが、長い間東京に住んでゐても、あまり出歩く事の無い益夫は、どうかすると電車の乗換にさへまごつかなければならなかつた。

「ぢや、お前も、わし達と一緒に久振りに東京見物といふわけか。は、い。」
と、伯父は笑つて、

「いや、學問をする者はそれがいゝのだ。東京にゐて東京を知らない——そこに、お前の面白いところがある。」

小夜子は初めて接した東京の風物に、さすがに娘らしい眼を輝かしながらも、しかし、どうも浮立たぬ様子だつた。

「どうも、あれは少しおとなし過ぎるのでな。賑かなところでも見せたら、すこしは氣が晴るかと思つて伴れて来たのだが——」

伯父は、さう益夫に話した。が、伯父の小夜子を伴れて来た眞意が、もう少し深いところにある

のだといふ事は、やがて益夫にもわかつて来た。

「婿の話もあるのだが、わしの眼鏡にかなつた奴は一人も居らん。それに、あんな田舎町で一生を埋もれさせるのも不憫なのでな。どうだ？ お前一つ家をもつて、あれを傍に置いとつて呉んか？」

なかに、わしは一人でやつて行く。」

伯父は、稍々遠慮つほい調子で囁くやうに云つた。益夫は、どう答へていゝか判らなかつた。彼は、小夜子を、可憐とも、好ましいとも思つたが、しかし、伯父の提案は、彼の心には少し重過ぎた。彼は、否ともなく、應ともなく、一時のがれに言葉を濁しておくより外無かつた。

三日目。上野から浅草にかけて一日あそび暮らして、二人を九段の宿に送りつけてから、益夫が下宿に歸つたのは、もう夜遅くなつてからであつた。

「お歸んなさい。」

と、例の女中のお初は待構へたやうにして云つた。

「たつた一足ちがひ！ あのいつもの方がお見えになつて、今まで待つていらしたのよ。」
いつもの方——其が、八千代である事は問ひ返すまでも無つた。

「何時頃から、何處へお出かけになつたかつて、とても厳しいおしらべだつたわよ。私が、益夫さ

んはおくにからのお客様で、一昨日から毎日お出掛けなんですつて云ふと、どんなお客様だつてお聞きになるの。私、正直に話してあげたわ。悪かつたか知ら？」

「正直に話した——つて、どう話したんだ？」

「おくにからお許嫁のかはい、娘さんがいらしたんだつて——」

「餘計な事をいふね。」

「そしたら、さつと顔色が變つたわよ。そして、ぢや、お歸りになるまで待たうつて、二時頃からつい先刻まで十時間近くも、じつとお部屋に坐つていらしたわ。あの方、本當に怒つてゐたわ。もう少し早く歸れば、あなたはひどい眼に會ふところだったのよ。」

「何を馬鹿な事を云つてゐるんだ？」

「馬鹿な事ぢや無いわよ。用心しないと、これは屹度悲劇になるわよ。」

女中のお初はこましくくれた顔をして云つた。

「馬鹿！」

益夫は、思はずふき出したが、笑つてしまへない何ものかが重苦しく胸を抑へた。部屋にはいつて見ると、机の上に、置手紙がしてあつた。

「久振でおたづねしたのに、お留守なので腹が立ちましたわ。女中さんの話ではお郷里からのお客様とやら。ではしかたがありませんわね。でも、今日はどうしてもお目にかゝり度いので今まで待つてゐたのですけれど、とうとう待ちきれ無くなつて歸ります。別に用事はないのですけれど、——いづれました。八千代。」

置手紙には、達者な走り書きで斯う書かれてゐた。

劇 場 で

そのあくる日は、帝劇に案内する豫定だった。——が、出かけようとする間際になつて伯父は急に、自分は止めるから、二人だけで行つて呉れと云ひ出した。

「私は、芝居はあまり見度も無いし、それに少し疲れたのでな、今日はこゝに残つて樂寢といふ事にする。小夜子、お前は益夫さんに伴れて行つて頂け。」

「だつて、お父様——」

小夜子は、一大事といふ顔附で、當惑さうに云つた。當惑は、益夫も同様だった。

「然うですか？ それは困りましたねえ。」

「はゝゝ、何の困る事があるものか？ 老人は足手纏ひぢや。今日は二人水入らずで、ゆつくり芝居見物をして來るがいゝ。」

「可厭ですわ。阿父様がいらつしやらないぢや——阿父様がいらつしやらなければ、私も止めますわ。」

小夜子は、赤くなりながら云つた。

「何を云ふのぢや。帝劇々々とあれほご樂みにしてゐたのぢやあ無いか。そんな事を云つて拗ねるものぢや無い。はゝゝ。」

伯父は、その老眼に愛撫の思ひをこめて小夜子を見て、

「な、益夫、面倒でも小夜子を伴れてつて呉れ。小夜子は、東京の芝居を長い事たのしみにしてゐたのだからな。」

「小夜子さん。ぢや、二人で出かけませう。」

當惑しながらも、益夫は斯う云はずにはゐられなかつた。

小夜子は、尙ほしばらくの躊躇の後、漸く益夫と二人で出掛ける事に同意した。

宿を出て電車に乗るまでも、電車に乗つてからも、小夜子は一言も口を利かなかつた。が、そのともすればぱつと赤くなる頬、絶えずおどくおどくと慄へてゐる瞳。彼女の全感覺は、最初の風を迎へた五月の若葉の如く鋭敏だった。そして彼女は、益夫が口に出して話しかける言葉には、はかばかしく返事もしないにも係らず、その聲の無い言葉では、始終何事かを話しかけようとするものゝやうだった。二三日、一緒に歩いたりしてゐるうちに、益夫は此の娘が自分に好意を——いや、好意

以上のある情思を寄せてゐる事を看取らずにはゐられなかつた。つゝましく微笑する口元の、深い羞恥のなかに動くひそやかな媚。極度の臆病さの底から火華の如く燃えあがるパッション。此の娘は、自分を愛してゐるのであらうか？と思ふと、益夫は、重い壓迫をその心に感じざるを得無かつた。

劇場に着いたのは開演時間に五六分前だつた。あまり演劇などに興味を有たない益夫は、此の劇場へも數へるほどしか來てゐなかつた。明るい灯影に華やかな色彩の渦が巻く劇場の空氣は、益夫にとつておよそふさはしくないものだつた。彼は、ある物感しさを感しながら、小夜子と並んで定めの席に着いてゐた。

やがて、幕が開かれた。例の女優劇で、出しものもありふれたものだつた。ほんやりとした眼を舞臺に向けながら、益夫は、ともすれば考へをよそにとられ勝ちだつた。

小夜子は、熱心に眺めてゐた。

「ごう？面白かつたですか？」

一幕濟んだ時、斯う聞くと、小夜子は黙つて微笑した。

二幕目になると、益夫は欠びをした。而して、早く閉場の時刻になればいゝと思つた。

二幕目の幕間にも、二人は座席に坐つたまゝだつた。三幕目の時は、さうして坐つてゐる事が堪へ難く怠屈になつた。

「すこし、歩いて見ませう。」

益夫は、さう云つて先に立つた。小夜子は黙つてあとについて出た。

廊下は、衣褶の音とさどめきとに充ちてゐた。きらびやかな装身具をひからかした令嬢や、流行の粹を凝らしたくろうと女やが、いかにもこれが自分の世界であるといふ風に押しあはせてゐる中を、小夜子は、肩身狭く益夫のうしろに寄り添うた。

長い廊下を一廻り、三階の方までも歩き廻つたが、幕間の時間はまだ餘つてゐた。

「お茶でも飲みませうか？」

さう云ひながら喫茶店の方に歩みをめぐらした時、益夫は、思はずはつとそこに立ちどまつた。つきあたりの、廊下の曲り角から、伴の男と何か話しながら此方にあるいて來るのは八千代だつた。そして、伴の男は、岡田博士だつた。

益夫は、工合の悪い時に會つたと思つた。出來るなら顔を合せ度くない氣がした。で、くるりと踵を返して

「此の次にしませう。もう時間がない。」

が、五六歩あるき出した時、益夫はうしろから呼びかけられてしまった。

「益夫さん！ 益夫さん！」

稍、甲高な聲が、亂れた足音と一緒に彼を追つて來た。彼は、仕方無しに立ちどまつて、當惑さうな顔を八千代の方に振向けた。

「矢張、あなただつたのね。」

八千代は、華やかな笑顔で笑ひかけた。

「やあ——」

益夫は、まばたきをしながら、八千代と、そして、八千代の背後に笑つてゐる博士の顔を交るゝ見た。

「辻君。しばらくだつたね。」

博士は、鷹揚な調子で云つた。

「御無沙汰して居ります。」

益夫は丁寧な頭を下げた。

「いゝところでお目にかゝつたわね。——でも、あなたが芝居にいらつしやるなんて本當に珍らしい事だわね。」

「久振でやつて來たんですよ。」

「久振？ 初めてぢやないの？」

「まさか、はじめてといふわけでもない。」

「然う？ ぢや、何回目？」

「二度目か三度目でせうね。」

「はゝゝ。ぢや、丁度わしと同じ位だ。わしも今度は久振で八千代さんに引張り出されたんだがね。」

博士は、少しは辯解するやうな心持をも籠めて云つた。

「二度目か三度目ぐらゐぢや、久振なんて云へないわね。」

八千代は笑つたが、その時初めて——いや、前から氣がついてゐたのだが、その時初めて氣がついたやうに、益夫の背後に小さくなつてゐる小夜子に眼をとめて、

「あら、おつれさんがおありになるの？」

「えい。」

益夫は、赤くなつておどく／＼してゐる小夜子を顧みて云つた。

「お郷里の方でいらつしやいますの？」

「従妹です。」

「然う？」

と、八千代は、親しげな眼で小夜子を見やつて、

「紹介して下さいな。」

益夫は、小夜子を八千代に、そして博士にも引合はした。すつかり狼狽した小夜子は、黙つて、唯、子供っぽいお辭儀をした。

「ねえ、益夫さん。もう御飯おすみなつたの？」

「未だです。」

と、益夫は、つい、正直に云つてしまつた。

「ぢや、私達と御一緒になさらない？ 此の次の幕間がいゝでせう？ 一緒にあつらへておきますから。」

「いや——」

と、益夫は口籠つた。

「いゝぢやあ御座いませんか？ ねえ、先生。」

「あゝ、然うしよう。八千代さん、御苦労だが、ぢや、今のうち云つといて下さい。」

博士の言葉も聞き合へず、八千代はもう食堂の方へ急いで行つた。

そのうちにベルが鳴つた。次の幕間の會合を約束して、四人はめい／＼の席に戻つた。

「あれはね、僕の友人の妹なんです。あの岡田博士の家で家庭教師をしてゐるのですよ。」

席に戻つてから、益夫は、小夜子の耳もとに囁いて聞かせた。

小夜子は、だまつてうなづいた。が、その思ひがけない人との會見が、彼女の心に激しい動搖を惹き起したらしい事は、舞臺の外のものかをほんやりと眺めてゐるやうな彼女の眼附にも見て取られた。その様子を見ると、益夫は、急に此の小さい従妹がいぢらしいものに思はれて來た。

やがてその一幕が了つた。二人は、廊下で待つてゐた八千代たちと連れ立つて食堂にはひつて行つた。そして、隅の方に用意されてあつた食卓を、四人は、八千代、博士、小夜子、益夫といふ順序でとり圍んだ。

「小夜子さんと仰有るの。いゝお名ね。さう、去年御卒業でしたの？」

八千代は、愛想のいゝ調子で、そんな風に小夜子に話しかけた。今夜の八千代は、へんにそはそはさはいやいでゐた。そして、いつにない厚化粧の、着物も銀鼠色の地に草花模様を置いたのを着て、いつにないはでぶくりの八千代は、その明るい電燈の下に輝くばかり美しくかつた。ブルユウ・ストツキングといふやうな理智的なハイカラさは影を薄めて、嬌かしさ、媚やかさの一面だけが、その大柄の身體の一つ一つの線に動き、そこに、女優かなどのやうな媚態を恣まゝにしてゐた。寶石のやうな強い輝きを柔かな二重瞼に包んだ眼、緋牡丹の花弁をふくんだやうな唇。嬢といふよりも、夫人と云ひ度いやうなその豊かさの前には、小夜子などは、ほんの小娘にしか見えなかつた。そして、實際、八千代は、小さな妹にでも話しかけるやうな調子で、小夜子にいろ／＼と話しかけるのであつた。

「然う？ では、お父様と御一緒にいらしたたのでございますか？ で、當分御滞在？——このまま、此方にいらつしやるのでは無いので御座いますか？」

小夜子は、おど／＼しながらも、一生懸命に、その壓迫を撥ねかへさうとでもするやうに、八千代の間に應へるのであつた。

「でも、いづれこちらへ出ていらつしやるんで御座いませう？ これからどうぞ、お親くね。私、辻さんとは、まるで兄妹のやうにお親しくしていたゞいて居りますの。でも、ねえ、益夫さんと、八千代は、益夫の方を顧みて、
「こんなおきれいな御従妹さんがおありになるなんて、私、今まで些とも知りませんでしたわ。ひどいわ！ 隠していらつしやるんですもの。ほゝゝ。」

「隠してなどゐやしませんよ。」

妙に恨みつほいやうな八千代の眼を見迎へながら、益夫は、一寸てれた様な顔附をして云つた。
「だつて——何故、もつと早く紹介して下さらなかつたの？ こゝで今夜お目にかゝつたから宜かつたのですけど。」

「併し、別に——」

益夫は、へんに擲んで来るやうな八千代の言葉に戸惑ひしながら、斯う口籠つた。

「はゝゝ。」

と、にや／＼笑ひながら、二人の顔を見くらべてゐた博士は、だしぬけに笑ひ出して、
「八千代さん、すこし妬いてゐるやうぢやな。」

「あら、先生！」

八千代は少し赤くなつて博士を睨むやうにした。——小夜子は、ぱつと赤くなつた顔を、低く卓の上に伏せた。益夫も仕方無しに苦笑したが、その顔は、矢張りくらか火照つてゐた。

「はゝゝゝ。」

と、博士は、その三人の様子を見て無意味に笑つたが、やがて話題を轉じて、益夫と、何かむづかしい學問」の話などはじめた。

が、その話が、あまり深入しないうちにベルが鳴つた。人々は、それに急ぎ立てられながら、ぞろぞろと食堂を出て行つた。彼等も、その群にまじつてそこを出た。

その次の幕間には、八千代は、益夫の坐席を訪ねて來た。そして三人で廊下の方へ歩きに出た。

八千代は、もう三年も前から相知つた者の様な慣々しさで小夜子に話しかけた。そして、二人は一緒に化粧部屋へはいつて行つたが、八千代は一足先に出て來た。八千代はそこに立つてゐる益夫を見ると、

「昨夜、おたづねしたのよ。」

と、早口で云つた。

「あゝ。失敬したね。」

「きれいな娘さんね。——あなたが好きさうなタイプね。」

「何を云つてゐるんです。」

益夫は苦笑した。

「毎日、おたのしみね。」

「馬鹿な！」

「隠してゐたのね。きまりが悪かつたの？」

「あなたの云ふ事がわからない？」

「あのぢや無いの？」

「何の事です。——それは——」

「とほけなくてもいゝわよ。ほゝゝ。」

八千代は、睨まねをした。

「馬鹿な！」

益夫は、再び苦笑したが、振返つて見るに、そこに、じつと二つの眼を睜つて、小夜子が立つて

ゐた。

やがて芝居がはねた。八千代は、益夫たちに、歸りの自動車に同乗する事をすゝめた。益夫は、氣が進まなかつたが——殊に小夜子はひさく迷惑さうだつたが、拒むわけには行かなかつた。

自動車に乗つてからも、八千代は、元氣よくしゃべり続けた。そのはしやぎ方には何となく不自然な、妙にヒステリックなところがあつた。小夜子はすっかり壓倒されてしまつたやうに言葉すくなに打沈んでゐた。

自動車は、九段上の小夜子たちの宿の前にとまつて、小夜子と益夫とをそこでおろした。

「どうもありがとうございました。」

益夫は、丁寧に博士に禮を云ひ、八千代にも、微笑を含んだ眼で會釋した。

「却て失禮しましたわね。小夜子さん、ぢやあ、またね。私、おちかづきになれて本當にうれしう御座いましたわ。」

八千代は愛想よく云つて、更に益夫に向つて、

「二三日うちに一度お訪ねしてよ。ね、その時小夜子さんも御一緒に、どこかへあそびに行きま

せう。」

自動車は二人をおろして走り出した。走り出した自動車の窓から、八千代は、あかるい月の光の中に二つの影を重ねて立つてゐる二人の姿を見た。——じつと喰ひ入るやうな眼で。

博士と二人だけになると、八千代は急にむつつりと黙り込んでしまつた。

「八千代さん。疲れたのかい？」

博士はいたはるやうに云つた。

「いゝえ。」

八千代は素氣なく云つた。

「あの娘は、辻の——従妹だとか云つたな。」

「えゝ。」

「つまり、約婚者といふわけかな？」

「さあ、どうでせうか？」

「どうもさうらしいね。初な、いゝ娘ぢやあないか？」

「えゝ。」

『辻が、あんな美しい約婚者をもつてゐるようとは思ひがけなかつたな。八千代さんは、今まで知らなかつたのかい？』

『……………』

八千代は、聞かない振をして押黙つてゐた。

『して見ると、辻もまるで仙人といふわけでもないのだな。いや、なか／＼うまくやつとる。はは。』

だが、八千代は、ちつと眼の前の空間をみつめたなり、顔の筋肉一つ動かさなかつた。

『八千代さん。どうかしたのかい？』

『……………』

『疲れたのだらう？ あんたは、今夜はひどくはしやいでゐたぢやあ無いか？ え、どうかしたのかい？』

博士は、その顔を横からのぞき込むやうにしながら、そつと膝の上に置かれた八千代の手を掻きさぐるやうにした。彼女の手は、彼女の心臓そのもののやうに、熱ばんで、そしてふるへてゐた。

博士は、その厚化粧の、白粉のほひのする頬へ、尖つた鼻の尖を押しつけるやうにしながら、

『八千代さん！』と、もう一度呼びかけた。ひと度、彼女と、あのやうな關係に陥ちてから、博士の老年のパツションは、その許された肉體の前に、ともすればつゝしみなく燃えあがつた。博士はその手を強く引き寄せようとした。

八千代の身體は、引かれるまゝに博士の膝に靡きかゝつたが、其手を振りはなして立ち直ると、八千代は、屹とした調子で、

『およしあそばせ。』

と云つた。そして、いとほしげに眉の根をよせて頭を打ち振つた。

實際、八千代はその時たまらなく博士がいとはしかつた。いつもは、それが妙に官能的に彼女を刺戟する、その、羅紗の匂ひと葉巻の匂ひとの交りあつた博士獨得の一種の匂ひが、今は嘔吐を催すほどいとはしかつた。

八千代の心は、今、はげしい悔に嚙まれてゐた。

——私は、どうして、こんな事になつてしまつたのだらう？

八千代は、さう心の中に、繰返した。何も彼も自分のした事だ。自分の責任だ。自分の責任は、自分で負ふより外は無。それが彼女の覺悟だつた。そして、彼女は、それがどんな不覺のあやま

ちであつたにせよ、そのあやまちを立派に意義づけ、立派に生かす事が出来ると思つてゐた。自分は博士を愛する事が出来る。本當に博士を愛し、又、博士に愛せらるゝ事によつて、そのあやまちを意義づけ、活かすことが出来ると思つてゐた。——が、今や、彼女は、それが一つの誤算であるか、若しくは一つの瘦我慢でしかない事を知らねばならなかつた。
彼女は、抑へ抑へてゐた悔が、遂にそのかま首をもたけて、鋭く心臓を噛みはじめた事を感じずにはゐられなかつた。

心の秘密

そのあくる朝、益夫が起きたばかりのところへ、女中が來客を告げて來た。名刺を見ると、關口謙三だつた。

「通して呉れ。」

益夫は、何が無しに不機嫌な調子で云つた。謙三と益夫とは高等學校から大學まで、引續いての學友であつたが、格別親しくしてゐるといふ仲でも無かつた。併し、謙三が八千代への熱心な求婚者であり、益夫が八千代の亡兄の親友で、亡兄に代つて妹のやうに八千代を愛してゐる男であるといふ點で、二人の間に、ある特別な氣持が通ひ合つてゐる事は争はれなかつた。益夫は、謙三の來訪が、八千代に關しての用件である事を直覺した。而して、それが何故か益夫をよろこばせなかつた。

例のやうに、きちんと思つた、貴公子然とした瀟洒な姿で、謙三は部屋へはひつて來た。

「やあ！」

「益夫は懶く見迎へた。」

「こんなに早くから押しかけて、御迷惑だらうと思つたんですけどね。」

謙三は、落ちつかない調子で云つた。

「いや。今日は僕もめづらしく早起をしたんだ。」

「さうですか。若しかしたら未だおやすみ中かと思つたんですけどね——」

高等學校も大學も、謙三は益夫より二級ばかり下だつた。それだけに、謙三は益夫に對しては、いつも後輩らしく謙遜な口のきゝ方をした。

五六分の間、氣乗りのしない世間話がほつり／＼と交された後、謙三は漸く思ひ切つたやうにして、

「僕、一寸、あなたにお話し度い事があるんですがね。——さうも、へんな話なんですが——」

「どんな話です？」

益夫は、面倒臭さうに云つた。

謙三は、もぢ／＼して額の汗を拭つて、

「あの、今、岡田博士のところに居られる塙さんの妹さんですがね。あの方は、辻さん、あなた

とあの方は非常にお親しいやうですが、あなたには、何も彼もお打明けになるのでせうね。」

「何も彼も打明けるといふ程でもないが、兎に角親しくはしてゐるですよ。」

「辻さんは死んだ兄さんの身代りだつて、八千代さんは、冗談にそんな事を云つておいでゝした
が——」

「死んだ兄さんの身代りか？ はゝゝ。」

益夫は、力無く笑つた。

「それで、何も彼も、あの方の一身上の事は皆、あなたにはお打明けになつてゐる事と思ひます
が——」

謙三は、同じ事を、ぎこち無い調子で繰返した。

「いや、然ういふわけぢやないですよ。何も彼も打明けのなんて——女といふものは、秘密の多い
ものですからね。」

「ですが、八千代さんは、あなたにだけは、何でも隠さずに打明けののだと仰有つてでしたがね。
——それで、多分、八千代さんからあなたにお話してあると思ふのですが、實は、僕、八千代さん
に結婚の申込みをしたのですよ。」

「さうですか？」

と、益夫はいくらか冷やかな調子で、

「その話は、聞いた事がありますよ。」

「それで、僕はあなたに力を借して頂き度いのですが——。實は、僕、八千代さんからことわられて了つたのです。ことわられた以上、潔くあきらめなければならぬと思ふのですが、どうも僕あきらめきれないのです。それに、八千代さんのことわり方に、どうも腑に落ちないところがある——。非常に厚顔なお願ひですが、あなたからもう一度八千代さんによく聞いて頂き度いのです。」

八千代さんの本心のあるところを念の爲めにもつとはつきりと聞いて頂き度いのです。」

謙三は羞耻の爲めに赤くなりながら、一生懸命に云ふのであつた。

「然うですか？ 八千代さんは、ぢや、君の申込みをことわつたんですね？」

「ええ。何だか、土俵際で背負ひ投げを喰つたかたちで、僕も一寸意外なのですが——」

「で、ことわり方に腑に落ちないところがあるといふのは、どういふ事なのです？」

「八千代さんは、外に愛してゐる人があるといふんです。いやはつきり然う云やしなかつたんですが、まあ、さういふあの人の口吻なんです。もう純潔な娘ぢやない、といふのです。——だが、ど

うも僕にはそれが本當は思へないので。僕の申込みをはねつける爲めの口實に、そんな出鱈目な事を云つてゐるのぢやないかつて氣がするんです。」

「外に愛してゐる人がある？ もう純潔な娘ぢやあ無い？ ふうむ。」

益夫の額も物惱ましく曇つた。

「あの人の事は、あなたは何も彼もよく知つて居られるでせう。——それは、本當なんでせうか？」

「いや、僕だつて、何も彼も知つてゐるわけぢやあ無いんですからね。」

と、益夫は苦笑して、

「そんな事を聞かれても、僕はどうも困るな。」

「ですが、もしあの人が外の男を愛してゐるとして、それが何人であるかぐらゐは、あなたなら凡そ見當がつくだらうと思ふのですが——」

謙三は、燃えるやうな眼附をして云つた。

「さうも一向判らんな。」

「本當に判らないんですか？」

「本當に判りませんよ。」

事實、益夫にも判らなかつた。益夫は、八千代の知つてゐる男達のなかで、八千代の對象に選ばれさうな者を、あれか、これかと、一通り考へて見た。が、あの矜持の高い八千代にかゝつては、及第しさうな者は一人も無かつた。強ひて探せば謙三その人位のものだつた。八千代は世間普通の女のやうに、男の外貌とか背景とかに心を惹かれる女では無かつた。謙三の頭腦と學問——選ぶならばせめてそれであらうと益夫には思はれたが、その謙三の求愛を斥けたとすると——さて、何人だらう？ 益夫にも判らなかつた。

「あなたにも判らないとすると、矢張それは出鱈目なんぢや無いんでせうか？ 僕をことわる口實にそんな事を云つただけぢや無いんでせうか？」

「さあ、さうかも知れませんが。」

「もし、然うなら、僕は未だ救はれる可能性があるといふものです。ねえ、辻さん、こんな事を云つて、大へん厚かましいんですが、僕は、心からあの人を愛してゐるのです。僕の全存在を擧げてあの人を求めてゐるのです。實際、あの人無しには、僕はやつて行けさうもないのです。どうぞ、お願いですから、僕に力を借して下さい。八千代さんは、あなたの云ふ事なら何でも肯く人だと僕は思ひます。どうぞ、僕の爲めに、あの人を説いて下さい。あの人を動かして下さい。」

謙三は耻も誇りも打捨て、絶り訴へるのであつた。

「關口君、君はそんなに八千代さんを愛してゐるんですか？」

「僕は、耻づかしいのです。こんな氣持になるまでには、どんなに自分で自分を叱りつけたか知れないのですが——此頃では、研究も仕事も、まるきり手につかないのです。」

「君のやうな秀才をそんなに苦しめるなんて、君の、その大切なあたまを、そんなつまらん事に悩ませるなんて——あの女は、いけない女だな。」

益夫は冗談らしく笑つた。が、その笑ひは、益夫の顔の憂鬱の色を一層濃くする爲めに役立つたに過ぎなかつた。

「笑つて下さい。僕は、つい此間までは、『戀』といふ言葉の代りに、『痴情』といふ言葉を使つてゐたのですが——」

「はゝゝ、『痴情』か？ 正に『痴情』に相違ないですね。はゝゝ。」

「笑つて下さい。だが、どうぞ、どんなに笑はれても憤る事の出来なくなつた僕を憐んで下さい。」

と、謙三は、うるみ輝く眼で益夫の顔を見上げて、
「而して、どうぞ、僕の爲めに、あなたからも一度八千代さんを説いて見て下さい。」

「説いて——？ つまり、僕に八千代さんを口説いて見て呉れと云ふんですね。」

益夫は、一寸抑捺ふやうに云つて、憂鬱の笑ひを笑つた。

謙三は、無作法な益夫の言葉に激しく自尊心を傷つけられながら、唯、首を垂れて、ちつと唇を噛み締めてゐるより外無かつた。それを見ると、益夫は、眞面目な調子で斯う云はずにはゐられなかつた。

「いや、承知しましたよ。君の氣持を、僕からよく話し、八千代さんの氣持も、はつきりときいて見ませう。而して、出来るだけ君の爲めに説いて見ませう。」

「どうぞお願ひします。あなたから説いて頂いて、これで駄目なら僕もあきらめますから。」と、謙三は稍々明るい顔附になつて、

「本當に耻知らずなお願ひです。あなたは嘸困つた奴だと思ひでせうね。」

「いや、そんな事は無いですよ。」

益夫は、いたはるやうに云つた。

「ですが、辻さん。あなたは、八千代さんと僕との結婚を、不賛成ではないでせうね？」

謙三は、ふと思ひ出したやうに斯う訊いた。

「はい。不賛成ならば、君の頼みをひきうけはしませんよ。」

「あなたは——あなたが八千代さんの兄さんとしてですね。八千代さんを僕に下さる事に不承知はないんでせうね？」

「だが、僕は、あの人の兄ぢやあ無いんだが——」

益夫は、苦澁の色を浮べたが、

「いや、僕があの人のお兄だつたら、無論、不承知ではありません。」

然う云つてしまつてから、益夫は思はず唇を噛みしめるやうにした。——が、謙三は、その益夫のはげしい苦惱の表情には氣がつかなかつた。

「それで安心しました。ぢや、どうぞよろしくお願ひします。」

謙三は無器用に、併し、心をこめて一つお辭儀をした。

謙三が辭して歸らうとするのを、一寸引留めて、益夫も一緒に宿を出た。益夫は、今日も伯父達のお相手に出かけなければならなかつた。

途中で謙三と別れた益夫は、時間の遅れたのを氣にしながら九段上の宿屋に急いだ。今日は、鎌倉の方へ案内する豫定になつてゐた。

「ごうも遅くなりました。出がけに人が来たものですから。」

益夫は、伯父達の部屋にはいつて行くと、先づ斯う云つて詫言ひた。

「やあ。」

と、火鉢の前にきちりと坐つてゐた伯父は、浮かぬ顔をして益夫を見迎へた。小夜子は、此方には背を見せて、部屋の隅の方で、旅行鞆を整理してゐたが、ちらと振り返つた眼は、泣いた後のやうに濡れてゐた。——たゞならぬ氣配が、すぐに益夫に感じられた。

どうかしたのですか？ といふ意味を眼に云はせて、益夫は伯父の顔を見た。

「小夜子かな。」

と、伯父は困惑の苦笑を浮かべて、

「今朝になつてから急に歸ると云ひ出してきかんのぢや。わしは困つてゐるのだよ。」

「歸るんですツて？」

と、益夫も吃驚して、

「どうしてです？ そんなに急に——未だ来たばかりぢやありませんか？」

「あれ程楽しみにして出て来て、それも昨日までは何時迄も居度いやうな事を云つてゐたのに、今朝

になつて、何うした原因やら、どうしても歸ると云ふのだがね。」

「何故です？ 小夜子さん。今日は、鎌倉の方へ行く筈ぢやありませんか？ こんなに天氣

もいゝし、そのつもりで僕は誘ひに来たのですよ。」

小夜子は、手を旅行鞆に掛けたまゝ、俯目になつて押黙つてゐた。

「からねんねえで、わからん事を云ひ出して困る。」

伯父は再び苦笑した。

「ね、小夜子さん。もう五六日遊んでいらつしやい。遠い處をやつて来て、まだ四日にしかならないぢやありませんか？」

「もう、見るだけのものは見たから。——あまり長逗留になつては、兄さんに厄介掛けて濟まんか。——などと小夜子は云ふのだよ。それは斯うして何日の案内は益夫さんも厄介だらうが、わたしは、いつその事厄介ついでにこのまゝ益夫さんに、しばらくの間小夜子を預かつといつて貰はうかとさへ思つてゐたのだがね。」

「まあ、お父さん。そんな事！」

小夜子はぱつと顔を赤くしながら、養父の顔を睨むやうにした。

露骨に諷意を示した伯父の言葉は、益夫の心をも妙に重苦しうした。益夫は、その重苦しさを、さり気無く拂ひ除けるやうにして、
『本當に折角出て来たんですから、ゆつくり東京を見ていらつしやい。ね、小夜子さん。どうしてまた急にそんな事を言ひ出したのでせうね。東京といふところは、そんなに可厭なところなんですか？』

『ええ、私、東京、嫌ひ。』

低い、しかし、はつきりとした聲で小夜子は云つた。

『さうですか？ それは困つたなあ！』

益夫も、仕方無さうに笑つた。

『ね、お父様。私、歸り度いの。我がまゝ云つて済みませんけど、私を歸らせて頂戴。』

小夜子は、養父に向つてその哀願を繰返した。彼女の眼には涙が一ぱい溜つてゐた。

『困つたなあ。何か氣に入らない事でもあつたのですかねえ。』

『ね、お父様。後生、私を歸らせて頂戴。私、歸り度いの。ね、お父様。』

小夜子は身體を押し揉むやうにして云つた。

『仕方がない娘ぢや。どうも——』

伯父は、嘆息するやうに云つた。

『わが儘云つて済みません。本當にお父様、済みません。でも、でも——私、歸り度いのですもの。』

小夜子は、然う云ひながら身悶えして、双の眼からほろ／＼と涙を溢した。而して、袖を顔に押當て、ヒステリイらしくすゝり泣きをはじめた。

『泣かんでも宜い。——いや、それほご歸り度いものなら、ぢや、歸るとしよう。益夫さん、ぢや私達はもう歸るわい。』

伯父は、思ひ切つたやうに云つた。

『ですが、ぢやあ餘り——』

益夫は酷く當惑したが、何と云つて禁めていゝか判らないので、そのまゝ、口を噤んだ。

『はゝゝゝ、若い娘の氣持と云ふものは——はゝゝゝ、あんなに東京々々と樂みにしてやつて來ながら、すぐに泣くほど歸り度くなるなんて、どうも薩張判らんわい。はゝゝゝ。』

伯父は、衷心の不興を笑ひに紛らしながら、歸支度をする爲めに立ちあがつた。

「急なお立ちで——」
と眼を瞬いてゐた。
少なくとも十日位は滞在の豫定と云ひ置いてあつたので、宿の番頭なごも、

鎌倉に案内するつもりで出て来た益夫は、その儘東京驛まで二人の歸郷を見送る事になつた。足もとから烏の立つやうな慌たゞしさが、少なからず益夫を狼狽させた。そして、話しかけてもろく返事もせず、頑なに自ら守る心持を見せて、自分の眼からは始終顔をそむけるやうにしてゐる小夜子の様子が、益夫の胸を苦しくした。

「可憐な者よ！ だが、お前は誤解してゐる！ さう、益夫は心の中で呟いて、悲しげな微笑を口もとに浮べた。

「妙な事になつたもんぢや。が、いづれそのうちに直して来る。」

汽車の窓越に別れの挨拶をしてから、伯父は斯う云つて、傍の小夜子を顧みたが、小夜子は、じつと眼の前の空間に眼を睜つたまゝ、石のやうに無表情な顔をしてゐた。——小夜子は、益夫の「ん様なら。」に對しても、唯、一寸お辭儀をしただけであつた。

「小夜子。お前はどうかしたのかな？ 頭痛でもするのかな？」

汽車がプラット・フォームを出はづれた時、老人は、打沈んでゐる小夜子に、斯ういたはりの言葉を掛けた。

「えー。少し——」

小夜子は聞えるか聞えないかの低聲で云つた。

「だが、どうしてそんなに急に歸り度くなつたのだらうな？」

詰るやうには無く、老人はもう一度訊いて見た。昨夜、帝劇から歸るとすぐに、明日歸り度いと云ひ出して、とう／＼斯うして歸るまでに強情を張り通した小夜子の態度が、平素は極めて従順な小夜子であるだけに、老人には不思議に思はれてならないのだつた。何がそのやうに、急に小夜子に東京を厭はせたか？ 單なる氣紛れにしては、強情の張り方が根強過ぎるし、第一、氣紛れに強情を張るやうな小夜子でもないのに、昨夜からの小夜子は、實際、いつもの小夜子のやうではなかつた。老人はさうも腑に落ちなかつた。

小夜子は、さう養父に問はれると、すぐにまた涙含んでしまつた。激しい悲みと惱みとが、彼女の胸を搔撈つてゐるのだ——

「え。どうして、そんなに急に東京が可厭になつたのだな？」

「だつてお父様。」

と、小夜子は涙にうるむ聲で云つた。

「兄さんが、何だかうるささうな顔をなさいましたもの。毎日々々、私達の案内役で兄さん何だか御迷惑さうでしたわ。」

「唯、それだけの事か？——いや、それもお前のひがみといふものだよ。なる程、益夫は少し迷惑だつたにしても、わしとお前の爲めならその位の迷惑は、喜んで飲んで呉れてもいゝ筈だ。何も、益夫にそんな遠慮は要らんぢやあ無いか？ お前だつて、いづれ東京へ出て來ることになるだらうし、さうしたら、益夫にはうんと世話に——は、は、は！ 益夫も眞逆それを迷惑ぢやとは云ふまいが——大いに益夫の世話になる事になるかも知れんのぢやで。そんな他人行儀な考へ方は、どだい、捨て、しまはにや——」

「いゝえ。お父様。」

小夜子は、絶るやうに、その優しい、老いた養父の顔を見上げて、

「私、もうこれツきり東京へなんか來ない事よ！」

「どうして、そんな事を云ふのだらうな。」

「私、嫌ひ！ 私東京なんて嫌ひ！」

小夜子は、低く、しかし、叫ぶやうな調子で云つたが、また、その眼から涙の珠が轉がり出た。

「どうしてだらうな。どうもわからないな。」

老人は、呆氣にとられたやうに、小夜子の顔を打眺めた。

え、わからないのよ。お父様、あなたにはわからないのよ！ と、小夜子は心の中で云つた。

小夜子の眼には、あの昨夜帝劇で會つた美しい人の姿が——親しげに、なれ／＼しげに益夫と語つてゐた、而して、此の人は私のものよ、とでも云ひ度げに、その益夫との親しさ、なれ／＼しさをわざとひけらかすやうにさへ振舞つてゐた美しい人の姿が、そのさま／＼の姿態の一つ一つを、今再び見るやうにはつきり／＼浮び上つてゐた。戀する處女の心の感じ易さ！ その敏感さは唯、一緒に食事をし、一緒に自動車自動車の五六分を過したといふだけの間にすべてをそこに見てとつたのであつた。勿論、そこに彼女の思ひ過しがあつたにせよ、彼女の觀察は、乃至直覺は、大體に於て誤まつてはゐなかつた。益夫も、八千代も、彼等自身恐らくはつきりと自覺してはゐないその二つの心の秘密を、この、聴くも感じ易い娘は、愛するものゝ本能を以つてはつきりと掴んでしまつたのであつた。

ダリアの嘆き

伯父と小夜子とを東京驛で見送ると益夫は、一方何となく濟まぬ氣がしながらも、一方では重荷をおろしたやうにほつとした。小夜子も思ふといぢらしかつた。唯ひそかな怨みを涙の底の腫に見せて、傷けられた心を抱いて歸つて行つた小夜子を思ふと、益夫の胸は、いぢらしさの爲めに痛むのであつたが、しかし、さればと云つて、どうする事も出来るわけのものでは無かつた。

省線を牛込驛で捨てると、益夫は、初夏の爽かな日の下に憂鬱な物思ひを運んで、光と影との強く路上に交錯した神樂坂の通りを、ゆつくりとのほつて行つたが、とある草花屋の店先に通りかゝつた時、

「あら！」

と、はじけるやうな聲が、突然に彼のうなだれた額を打つた。眼をあげると、そこに八千代が、今、買つたらしいダリアの、白と紫の花束で、顔の半ばを掩ふやうにしながら、につこりと笑つて立つてゐた。

「やあ！」

益夫も笑つた。笑ふと一層淋しくなるやうな例の笑ひ方で、

「いゝところでお目にかゝつてね。私、これからあなたのお許へお寄りしようと思つてゐたの。――お寄りしてもお留守かも知れないと思つたけど、若しお留守だつたら、此の花をね――」

と、八千代はダリアの花束を一寸振るやうにして、もう一度につこりと笑つた。ぱつと花の咲いたやうな笑ひ方で、

「その花を？」

「此の花の花弁を撈つてね、あなたのお部屋へ一ばいに撒き散らして置いてあげようかと思つたのよ。」

「それは亂暴だな。」

「――でも、お留守で無くて宜かつたわ。おかげで此の花も撈られずすんだわ。幸せな花。あけませう。」

八千代は、その手なる花束を益夫の前に突き出した。

「ありがたう。」

益夫は苦笑しながらその花束を受取つた。

「だけど、あのお客様の方は今日はいゝの？」

「もう歸つたんだ。」

「あら、もうお歸りになつたの？」

「あゝ。」

「本當？」

「今、東京驛まで送つて來たところですよ。」

「然う？ もう歸つておしまひになつたの？ それで、そんな浮かない顔をしていらつしやつたのね？」

「馬鹿な！」

「また始まつた。馬鹿な！ つてのがあなたの口癖ね。——でも、本當にいゝお嬢さんね。私、すつかり妬いちやつてよ。」

「馬鹿な！」

と、益夫は、今云はれたばかりの口癖を又しても出してしまつた。

「でも、あなたも本當に酷い人よ。私、あなたといふ人を、すつかり見損つちやつてよ。」

「どうしてです？」

と、益夫は云つたが、その時或るレストランの前に來てゐたのに氣がつくと、

「一寸、何うです？ お茶でも——」

八千代はうなづいて、益夫のあとについて、入口からすぐの階段を二階へあがつて行きながら、

「本當に、私、あなたを見そこなつてよ。」

「どうしてです？」

益夫は更に聞き返した。

「だつて、あんな方がいらつしやるのに、今まで隠していらつしやるんですもの。」

二人は、明るい、さつぱりとした廣間の片隅の、鉢物の蔭になつた卓に對ひ合つた。八千代はその生々しく肉附いた肌理の細かな眞白な兩手を、大理石の卓の上に投げ出すやうにした。彼女の健康な血のほてりが、そのつめたい卓の面に、氣持よく吸ひとられて行つた。手ばかりでは無かつた。彼女の全身は燃えてゐた。やるせない生命の盛りに燃えてゐた。

「別に隠してなどゐたわけぢや無いんだ。——それに、別に何でも無いんだから——」

『何でも無い事があるもんですか？ 本當に私、腹を立てたわ。』

と、八千代は、わざとらしい誇張のうちに、しかし、冗談には終らせない心の動きを含めて、

『私、私の事は何も彼もあなたにお打明けてるのに、あなたは、隠していらッしやるんだもの。あなたがそんなんなら、私だつて、馬鹿正直に何も彼もお話するんぢや無かつたわ。いいえ、私もうあなたにいろ／＼の事をお打明ける事は止めにするわ。』

『八千代さんは、どうも怖ろしい獨斷家だな。さうして、ひとりで、へんな事に決めて、ひとりでもだらなく憤慨してりや世話は無いや。』

『そんな事云つてごまかさうつたつて駄目。あのお嬢様が、あなたにとつて、どんな關係な方であるかぐらゐ、一目見てすぐにわかつたわ。』

『いや、はや。』

『本當に私腹が立つたわ。今まで、すつかりだまされてゐたんだもの。』

八千代は、本當に腹が立つたらしく、眼もとをすこし赤くしてゐた。

『はゝゝ。閑話休題だ。僕は、今日、八千代さんに少し話があるんだ。』

益夫は、少し眞顔になつた。

『どんなお話？』

『一寸むづかしい話なんだ。こんなところで話すのはふさはしくない話なのだがね。實際、嚴肅な問題なのだが――』

と、益夫はあたりを見廻すやうにしたが、幸ひ二人の外に客は無かつた。窓の外に吊してある鳥籠の中で、焦茶色の印度雀が、ちゆちゆと囀る外には、裏通りに面した此の二階は、特に耳につく物音もなかつた。

『實はね、今朝、關口君がやつて來たのだよ。』

『さう？』

と、何氣なく云つたが、珈琲碗を掻き廻す銀の匙が、かちりと音をたて、碗の縁に觸れた。關口君聞くと、八千代の表情には、ある混亂が起つた。

『あなたは八千代さん、とう／＼、關口の申込をことわつたさうだね？』

『えゝ、おことわりしたわ。』

『あの男、氣に入らないかい？』

『さあ、何うでせう？ はつきりと考へて見た事は無いのよ。』

「考へて見ずにことわつたのか？」

「兎に角ことわりました。關口さん、何とか云つていらしつて？」

「關口は酷く失望してゐたよ。而して、僕にもう一度八千代さんを説いて見て呉れと云ふんだがね。——ことわられたには違ひ無いが、どうも、八千代さんのことわり方が腑に落ちないと云ふのだがね。」

「どうしてでせうね。」

と、八千代は云つたが、その美しい眉を強く押しひそめて、

「いやね。あの人、そんな事を人に頼んだりして——ほゝゝ！ そんな事は人に頼んだりするものぢや無いわ。頼まれるものでもないのよ。」

「然うかも知れ無い。だが、あの男もよく／＼思ひ餘つたればこそなんだ。學問の方には秀才でも御同様、女にかけちやからきし劣等生らしいからね。」

「で、ことわり方が腑に落ちないと云ふのは、どういふわけなの？」

「八千代さんは外に愛してゐる男があるつて關口に云つたさうぢや無いか？ それは本當かこ？」

「本當よ。」

と云つたが、八千代は直ぐに、

「うそよ！」

と打消した。

「本當なのかい？ うそなのかい？」

「どう思つて？ 益夫さんは。」

「さあ、本當かも知れないと思ふんだがね、本當とすれば、一體それは何人なの？」

「わからない？ あなたには——」

「わからない。——それは、僕の知つてゐる人なのかい？」

「勿論、あなたの知つていらつしやる方よ。」

と、八千代は笑を含みながら云つたが、八千代は、此の前に丁度同じやうな會話を、益夫とした事を思ひ出した。益夫の下宿を訪ねて、益夫の原稿の間から、書き捨ての戀の詩を見つけ出した時、益夫が何人を愛してゐるかに就いて、丁度今と同じやうな會話を自分の方が聞き手になつてした事を思ひ出した。そして、八千代は云ひ添へた。

『あなただつて私に話して呉れなかつたわ。だから私も話してあげないわ。あてゝごらんさい。』
『何人だらうな？』

『ほゝゝ！ わからないの？ ほんやりねえ、あなたは——』

八千代は笑ひながらちつと益夫の顔を見つめた。その不思議な熱を帯びて、迫るやうに輝く眼が何が無しに益夫の心を激しく波立たせた。

『ぢや、云つたけませうか？』

『えゝ。』

『それはね、私の愛してゐる人はね、ね、益夫さん、あなたなのよ？』

益夫は一寸の間呆氣にとられたやうに八千代の顔を眺めてゐたが、

『ほゝゝ！ 冗談云ふのは止めて下さい。眞面目な話をしてゐるんだから——』

『あら、私、まじめよ。』

『馬鹿な事ばかり！』

と、益夫は、さも馬鹿々々しげに言つたが、八千代の顔にも、益夫自身の顔にも、冗談にしてはしまへない何ものがちらとその刹那に動いた。が、その秋の夜空の稲妻のやうな閃めきは、すぐ

に、二人が同時に發したてれかくしの笑ひで掻き消されて了つた。

『ほゝゝ！ でも駄目ね。私見たいなお轉婆はとも益夫さんのお氣には入らないわね。』

『ほゝゝ！ あなたは本當に出鱈目ばかり云ふ人だな。』

と、益夫は内心の動搖を押し隠しながら、

『兎に角ねえ。關口は非常に熱心なだから、もう一度考へ直して見たら何うだらう？ ことわるにしても、よく得心の行くやうにすることわつてやるんだね。無論、僕は強ひてすゝめはしないけど、關口はあれ程あなたを愛してゐるんだから、あなたを幸福にする事が出来る男かと思ふんだ。』

『然うね。でも、私、もう——』

八千代は、薄紫の半襟から抜け出した白玉のやうな後頸をくねらせて、眼を卓に伏せて、物惱ましく吐息をした。自分はまだ處女では無いのだ——

自分はまだ處女では無い。その事を、しかし、八千代は益夫に打明ける勇氣が無かつた。今までどんな事でも大小と無く皆打明けて、益夫に對しては、全然秘密といふものを有たない八千代だつた、が、今は此の打ち明け難い大きな秘密が、石のやうに八千代の胸に横はつてゐる。八千代は罪ある者の如く、益夫の前に首を垂れるのであつた。

その様子が、益夫の注意を惹かないわけは無かつた。

「ねえ。八千代さん、あなたは何か考へてゐる事が——一人で苦んでゐる事があるんぢや無いか？」

卒然として、益夫は斯う問うた。

「そんな風に見えて？」

「あゝ。」

「——いろ／＼ね、迷つてゐるのよ。いつかね、何も彼もお話して、益夫さんに相談に乗つてい

たゞき度いと思ふの。」

長い睫毛の下に、八千代の眼は、黄昏の湖のやうにかなしく翳つた。

ひどくはしやくかと思ふと、すぐに、憂鬱に思ひ沈む——此頃の八千代の様子には、へんに不自然なところがあつた。美しく、賢く、すこやかに、どの點からも豊かに恵まれながら、何處かに生涯の悲劇を想はせる何ものかを潜めてゐる此の人に、そろそろ受難の時がやつて來たらしいと思つたが、しかし、益夫はそれ以上追及しようとはしなかつた。

一緒に書飯を喰べてそこを出た二人は、肴町の停留場のところで別れた。そして益夫は下宿へ八

千代は電車に乗つて大久保の邸へ歸つた。

邸に歸つて自分の部屋にはいると、八千代は机の前に坐つて、頬杖を突いてほんやりと、考へ込んだ。少し頭痛がした。とりとめもなく心が亂れて、何とも云へず物なやましかつた。

——八千代は、今、乗つて來た電車の中で隣り合はせた、赤ん坊を抱いた若い細君によつて暗示された一つの不安を、その胸に喚び起した。健康な彼女には、こんな事は曾て無かつた。もう、い

つもより二週間もおくれてゐる。一寸した故障ならいゝのだけれど——
萬一——と思ふと、彼女は急に眼前が暗くなるやうな氣がした。萬一？——しかし、萬一、然

うであつたとしても、寧ろ當然過ぎる事ではないか？ 處女ならぬ身の、それは拒み難い一つの結

果に過ぎないではないか？

彼女は、自分の落ちたわなの深さにをのゝかすにはゐられなかつた。

わな！ 然うだ。それは矢張わなだつた。
博士とあゝした關係になつた事——それは博士にとつても自分にとつても、一つの過失に違ひ無かつた。が、八千代は、それを過失と認め度くなかつた。いや、過失にしろ、過失ならその過失を立派に自分の生涯に意義づけたいと彼女は思つてゐた。彼女は、平素から博士を尊敬してゐた。博

士はすぐれた人格者であり、世に稀な碩學である。その人格とその學問とに、無上の尊敬を捧げてゐた彼女は、思ひがけない博士の誘惑に脅かされながらも、それを許すに或る喜びをさへ感じてゐた。年齢の相違、世間態、それ等のことも、博士との愛の生活に入る上には、さしたる支障にはならないと思つた。まことに、此の人こそ、自分の矜りにふさはしい。自分の若さのうちに、博士の疲れた精神をよみがへらして博士の學問を更に大成せしめるに役立つならば、自分の生涯がよし犠牲に終らうとも、その犠牲には意義がある。さう考へた彼女は、ある殉教的な氣持にさへなつて、その身を、その心を、甘んじて博士に與へたのであつた。

が、さうした氣持はすぐに裏切られる時が來た。それが要するに、悔いを包むための心の虚構でしか無かつた事を、第一の過ちをごまかさうとする爲め、更に重ねられた第二第三の過ちでしか無かつた事を、八千代はすぐに思ひ知らねばならなかつた。

既に人生の夢を失ひロマンチズムを失つた博士にとつては愛すると云つても、その愛は、單なるセツクスの慾望に過ぎなかつた。唯、此の若い肉體だけが、博士の熱求の對象だつたのだ——と思ふと、八千代は、激しい幻滅に打碎かれずにはゐられなかつた。そして、淺ましいベッドの戯れに、我と我が獸の姿を耻ぢずにはゐられなかつた。

そして、又、八千代は今まで強ひて認めまいとした自分の耻づかしい過失を、はつきりとそこに見ずにはゐられなかつた。然うだ。矢張私は負けたのだ。私の心が、私の肉に裏切られたのだ。私は矢張肉に負けたのだ。性慾といふ自然のわな！ いつの間にかそのわなの中に落ちてゐたのだ！

八千代の心は、悔いの毒蛇に、すたくに噛み裂かれるのであつた。

八千代は、机の上に両手を重ねて、その上に突伏して了つた。しばらくすると、八千代は氣を取直して机の前から立つた。こんな時は、ピアノでも弾いたら氣が晴れるかも知れない——さう思つて、ピアノの部屋へはひつて行くと、幹太郎がこちらへ背を見て、窓際の卓によりかゝつてゐた。

八千代がはひつて行つても、幹太郎は氣がつかないらしかつた。

「幹太郎さん！」

八千代は、小聲で斯う呼びかけた。

幹太郎は、はつとして振向いた。そして、おぎ／＼とふるふる二つの眼で、八千代の顔をじつと見上げた。

「何してるの？」

八千代はさり気無く呼びかけた。あの手紙の事から暫くの間幹太郎は、八千代の顔を見るとすぐに真赤に頬を染めて、ある時はまた青ざめて、襲はれた獣のやうに逃げてしまふのであつたが、此頃は少し打解けて正面に顔を見合せる事が出来るやうになつた。

が、八千代にはその幹太郎の眼が今は怖いのであつた。

純な少年の、心の限りをつくした憧憬と渴仰と——まるで、神の姿をでものぞむやうなその一生懸命な眼附が、八千代には怖ろしかつた。自分がもう淺ましく汚れた女であるとも知らずに、偶像の如く自分を仰ぐその眼附が——

懊惱の日

懊惱の日は懊惱の日に續いた。八千代は、朝から部屋に閉ぢ籠つて——どうかすると、寢床のなかに身を横たへたまゝ、涙もない物思ひに、苦しく思ひ悶えるのであつた。

「八千代さん、どうかしたのかい？」

博士は、心配さうに聞いた。

「……………」

八千代は、答へなかつた。

「どこか、身體でも悪いのかい？ 大へん青い顔をしてゐるぢやあ無いか？」

「少し頭痛が致しますの。」

八千代は、うるささうに云つた。

「醫者に診て貰ひ？ どこか身體が悪いのぢやあ無いか？」

「いえ、何でもありません。」

「本當に何でも無いのかい。」

「ええ。何でもございませぬ。」

八千代は、ついと顔をそむけてしまった。博士は、取附く端も無く、もぢくして、

「どうも、あなたは此頃酷く機嫌が悪いんだなあ！」

こ、當惑さうに苦笑した。が、博士は、束ねあまる黒髪の、二すぢ三すぢのおくれ毛の蔭に、白粉無しの頬の色の蒼白い疲れを見せたその物なやましげな風情を見ると、或る病的な感覺から一層男性の嗜慾をそゝられたらしく、うしろからそつと八千代の肩に手をかけた。まろらかな肩は、既に男を知つた女のなまやかな弾力を博士の掌に傳へた。そして、思はず肩越しにすべり落ちたその掌は、……

が、八千代は、首を左右に振りながら、その抱擁の中からすべり抜けた。

「いやでございます。先生——どうぞ、私をそつとしておいて下さいませ。」

彼女は冷たい聲で云つた。

博士は器量わるく、彼女の身體から手を離した。そして、

「妙だなあ。八千代さんは——」

と、獨言らしくつぶやいた。彼の顔は、耻の爲めにすこしあからんでゐた。

八千代は、窓越に黄昏の庭を見やりながら、まじろぎもしなかつた。博士は、彼女の視線のあとを追うて、ほんやりと押黙つてゐた。

「八千代さん。」

と、博士が呼びかけたのは、その重苦しい沈黙の二三分が往つてからであつた。

「八千代さん。あなたは矢張後悔してゐるんだなあ。」

八千代は答へなかつた。彼女は凝然として石像の如く動かなかつた。

「いや。後悔するのも無理は無い。わしは、本當に悪い事をしたのだ、あなたはわしを限んでゐるのだらう。わしは、心から濟まんと思つて居る。八千代さん、さうぞ、わしを許して呉れ。わしの生涯の過失だつたのだ。な、八千代さん。どうぞ、わしを許して呉れ。」

「いゝえ。」

と八千代は初めて口を開いた。

「わたしだつて悪かつたのでございます。何も先生が、そんなにあやまつたりなどなさる事は御座いません。」

さう云つた八千代の言葉は、しかし、氷のやうに冷やかに石のやうに素氣なかつた。

『いや、わしの罪は許されない。わしは、許し難く自ら責めてゐるのだ。自ら責めながら、わしは斯うして罪を重ねてゐる。わしが弱いからだ。わしは、自分の弱さを呪はずにはゐられない。』

十分前、淫らな慾望に燃えてゐた博士の眼は、今罪の暗さに戦いてゐるのであつた。

八千代は、然うして、自分の前にうなだれてゐる博士を見ると、又、博士が氣の毒になつて來るのであつた。嫌惡と反感とが、底から泉み來る別の感情の爲めに次第に柔らげられて來るのであつた。

『先生。』

と、彼女は遺瀨無げな眼で博士の顔を見ながら云つた。

『弱かつたのは私も同じなので御座います。先生ばかりが悪いのでは御座いません。私、先生を恨んだりにくんだりしてゐるのでは御座いません。恨むなら自分を、にくむなら自分を——私、自分を恨んでゐるのでございます。自分を憎んでゐるので御座います。』

彼女の言葉は相變らず冷やかだつたが、それは、もう、刃のやうな冷やかさでは無くなつてゐた。秋雨のやうに、相手の心に沁み入る冷やかさであつた。

『八千代さん。あなた、いつもそんな風に云ふ。——あなたがそんな風に云つて呉れるので、わしもつい、その、何だ。甘えるやうな氣持になるのだ。あなたが、然うしてわしをいたはつて呉れるので、わしはつい罪を重ねるやうになるのだ。あの時——』

と、博士は、あの最初の夜の事を苦しく思ひ出しながら云ひ續けた。

『あの時、あなたがもつと手強くわしを拒んで呉れたなら……あの飛んでもない邪惡な獸を、あの時、あなたが一と思ひに打ち殺して呉れたなら——いや、こんな事を云ふのは、まったく勝手過ぎるのだが——』

『私も、先生と同じやうに負けたのでございます。——私にはそれが出來なかつた。私自身にも、同じやうな弱味があつたのでございます。』

八千代の言葉は、次第に相憐れむ、同罪者のかなしみのうちに、その冷やかさを失つて行つた。

『あなたは、あまりに寛大であり過ぎた。あなたは、あれからも、わしから逃げようとはしなかつた——』

『先生。私は、先生が私を愛して下さるのだと思つたのでございます。』
云つて了つてから、八千代は、きつと前歯で下唇を噛んだ。

「八千代さん。わしはあんたを愛してゐるのだ。愛してゐる事は、たしかに、あんたを愛してゐるのだ。」

博士は云つた。が、その言葉には力が無かつた。

「たしかに？」

と、八千代は嘲りに似た笑ひを浮べて、

「いゝえ。違ひますわ。」

「何故だらうね？」

「本當に先生が私を愛して下さるならば、私は、斯んなに苦みは致しません。本當に愛されてゐるものは、もつと幸福でなければならぬ筈ですわ。」

「わしはあんたを愛してゐる。愛す可からざるあんたを愛してゐるわしの愛が、あんたを苦めてゐるのだ。あんたの苦みは、わしがあんたを愛してゐないからではなく、あんたがわしを愛する事が出来ないからなのだ。わしはあんたを愛してゐるのだが、あんたは、わしを愛する事が出来ない、それ故にこそ、あんたはあのやうに苦んでゐるのではないか？」

「いゝえ。違ひます。——それは、私が先生を愛する事が出来ないといふのも本當かも知れません

が、先生がわたしを愛して下さる事が出来ないのは、それ以上に本當なのでございます。」

「わしはあんたを愛してゐる。わしが、愛してはならぬあんたを愛してゐるのが、悲劇なのだ。」

「ほゝゝ。」

と、八千代は露骨に嘲りを示す笑ひ方で笑つて、

「悲劇だか喜劇だか知りませんが、本當の愛には、愛してはならぬとか何とか、然うした制限などあるものでは無いと私思ひます。愛してはならぬ——などと、お考へになるのは本當に愛して下さらない證據でございます。」

「そんな事を云うても、それは難題といふものだ。」

博士は呻くやうに云つた。

「先生、本當に先生が私を愛して下さるのなら、何故、先生は私と結婚して下さらないのです？」

八千代は、きつと博士の顔を見た。

「結婚？」

博士は、然も驚いたやうに、八千代の顔を見た。結婚——それは博士にまつて全く理解し難い不思議な言葉であるらしく見えた。

『ほゝゝゝ。』

と、八千代は、博士の顔に浮んだ狼狽の色を見ると、再び嘲るやうに笑つた。

『どうしてそんなにお驚きあそばすの？』

『だが、それは——』

『それは御迷惑だと仰有るの？』

『迷惑だなんて、決してそんなわけやあ無いが——いや、それはわしから云へば願つても無い事なのだが、だが八千代さん、わしはもう此の通りの老人だ。わしが此の先、あなたを幸福にしてあげられる事が出来るか何うか？——それは、わしが今あなたと結婚するとしたら、世間では何と云はう？ いや必ずしも世間の思わくを氣にするといふのではないが、どうもその、これは少し不自然だとわしが思ふのだ。不自然——そして、少し突飛な感じもする。』

博士の言葉は、いかにも苦しげであつた。その苦しげな辯解のうちに、八千代は、博士の冷たいエゴイズムを聞き取つた。博士の求めたものは唯自分の肉體だけだつたのだ。博士は本當に自分を愛してゐるので無かつたのだ。——今更のやうに八千代は判然とそれを思ひ知つたのであつた。

が、併し、八千代はその爲めに博士を責める事が出来たらうか？ 博士が、本當に八千代を愛し

てゐるのでは無いと同様に、八千代も亦本當に博士を愛してゐるのでは無かつた。二人の關係は、唯、その性の弱點に於て結び附いた關係に外ならなかつた。博士が八千代に求めたものが、唯、八千代の肉體に過ぎなかつたと同じく、八千代を博士に惹きつけたものも、畢竟は性以上のものでは無かつた。八千代は博士を責める前に、先づ、省みて彼女自身を責めなければならなかつた。

八千代は、今、結婚といふ言葉で、博士を脅かした。が、彼女自身も亦、博士と結婚しようなどと、本氣で考へて居るわけではなかつた。若し、博士からそれを求めたならば、彼女は必ず拒絶したに違ひ無かつた。——にも、かゝはらず、彼女は尙ほ、其の言葉を以て博士を苦めてやり度い氣がしてならなかつた。否、唯、博士を苦めてやり度い氣ばかりでは無かつた。自分の身體に感ぜられる一つの不安が——若しかしたら、母になつたのではないか知らと思はれるその不安が、今まで敢て口にしなかつた此の言葉を、博士の前に持出させたのでもあつた。

『先生、矢張あなたには、私と結婚して下さる勇氣はおありにならないのね。』
と、八千代は唇を噛みながら云つた。

『さういふわけではない。——さういふわけではないが、わしはあなたの爲めを考へてゐるのだ。それは、八千代さん、あなたの爲めによくないのだ。わしと結婚して呉れる——あなたの然う云ふ

のが本當ならば、わし自身はどんなに幸福か知れないが、しかし、わしはあなたを幸福にしてあげられる自信をもつてゐないのだ——」

『でも、先生、然うするより外に道がないぢやありませんか。』

『然うするより外に——道が無い？』

博士は嘆息するやうに、八千代の言葉を繰返した。

『えい。私、そんな風に思はれるのでございます。』

八千代は、自分の胸に包み餘る不安を、思ひ切つて博士に打明けようかと思つた。が、羞恥と、もう一つ或る複雑な感情とが、彼女にそれをさせ無かつた。

『八千代さん。今更こんな事をわしの口から云へるわけのものでは無いが、どうだらう？ あんたは矢張あの男と——關口と結婚した方がよくは無いだらうか？ あの男は相變らずあなたのことを思うて苦んでゐるのだ。昨日もわしはあの男と會つた。あの男は、もう口に出しては何も云はないが、あの男がどんなに苦しんでゐるかはわしの眼にもよくわかつた。わしはあの男の前に顔をあげる事が出来なかつた。心からあの男に濟まないと思つた。』

『關口さんはお氣の毒ですわ。』

と、八千代は辛さうに云つた。

『でも、今更、わたし、こんな身體になつて——』

『それを云はれると、わしはもう云ふ言葉がなくなるのだ。だが、八千代さん、あの男はあなたを愛してゐる。あんなにまであなたを愛してゐる。あの男があんなにまであなたを愛してゐる以上、あなたのやうに然う窮屈に考へんでも——』

『ぢや、先生、總てを祕密の裡に葬つて、關口さんと結婚しろと仰有るのですか？ 關口さんが、私を愛して下さるのを幸ひ、何喰はぬ顔をして、あの人と結婚しろ。さう、仰有るんでございますか？』

『いや、然う云ふわけぢやないが——』

と、博士は口籠つた。

『それでは、あの方があんまりお氣の毒でございます。』

『だがね、關口はあんなにまであなたを愛してゐるんだから。』

『關口さんが、私を愛してゐる下さるなら下さるほど、私はあの方を欺いてはならないのでございます。』

八千代は嚴肅な調子で云つた。

『それは然うだ。——だが、もし、すべてを打明けた上で、尙且、關口があんたを愛するとしたならば——』

『すべてを打明けた上で——』

『さうだ。わしはあの男の前に懺悔しようと思ふ。わしは、あの男にわしの過失を詫びて、許しを請はうと思ふ。——あの男はあんたを愛してゐると同時に、わしにも好意をもつてゐるのだから、わしがすべてを打明けてわびたならば、わしを許して呉れぬ事はあるまいと思ふ。わしを許して呉れると共に、あんたをも屹度許して呉れるだらうと思ふ。』

『先生、私は、何も關口さんから許して貰ふ事などございません。私が何をしようと、それは私の自由なのですから。』

八千代は稍々氣色喰んだ。

『それは然うだ。だが、あんたの幸福の爲めに、あんたは矢張あの男と結婚した方がいゝとわしは思ふのだ。——正直のところ、わしはあの男にあんたを遣り度くは無い。だが、わしは、此上あんたを惹き付けて置いてはならないのだ。これはわしの煩惱なのだ。八千代さん、さうぞ、わしを捨

て、行つて呉れ。』

博士は、眼を閉ぢ腕をこまぬいて、首を左右に振るやうにした。

『私がそんなにお邪魔ならば——』

と、八千代は、眼に涙を含みながら、皮肉な調子で云つた。

『私は、何處へなりと参ります。けれど、私が何處へ行くかは私の自由で御座います。關口さんがどんなに私を愛して下さるにしても、私がこんな身體になつてゐる事をお知りになつたら、愛想をおつかしになるだらうと思ひます。關口さんが、それを忍んで下さるにしても、私、そんな弱味をもつて人の妻などになるのは可厭で御座います。』

『そんな風に云はれると、わしは益々困るばかりだ。いや、こんな事になつたのも、何も彼も皆わしが悪かつたのだ——』

博士は再び嘆息した。

その博士の困惑の様を見ると、八千代はもつと博士を困らせて、苦めてやり度い氣がして來た。

博士をのみ責む可きでは無い。責めるなら先づ自分を責む可きだとは思ひながらも、八千代は矢張博士を責め度い氣が——責めずにはゐられない氣がするのであつた。

書齋に戻つた博士は、卓の前の椅子に身體を投げ掛けて、暗い顔附で考へ込んだ。

先生は本當に私を愛してゐるのではない——然う云つた八千代の言葉が、博士の胸に繰返された。

先生は何故私と結婚して下さらないのです——然う云つた八千代の言葉が博士の胸に繰返された。

結婚？

本當にあの娘は、此の、わしと結婚する事などを考へてゐたのだらうか？ 博士は然う心の中で

獨言つた。本當にあの娘がそんな事を考へて居るとすれば——？

いや、そんな事はない！ 唯、あんな事を云つて見ただけなのだ。

だが——と、博士は思ひ返す。すべてに眞劍なあゝの娘の事だ。本當にさう考へて居るのかも知れない。

あの娘と結婚する。あの、若い美しい娘が自分の妻として、自分の命の限りをあの華やかな若さで包んで呉れる。自分にとつて、それは何といふ幸福だらう！ その結婚によつて自分が彼女を幸福にし得るや否やは尙束無にしる、彼女が自分を幸福にして呉れる事は慥かである。

併し、然うは思ひながらも、博士の心はその幸福の前に意氣地無く尻ごみした。

博士は、自分よりもまだ十歳も年下の、英才の名を謳はれた某理學博士が、自分の娘の友人なる女學生を愛し、その少女と結婚した爲めに、各方面からの一齊の非難に見舞はれ、遂に教授の職をも退かねばならなくなつた最近の事實を思ひ浮べた。もし、自分が八千代と結婚したならば、必ず同じやうな非難が、否、それ以上の非難が、忽ち自分の地位と名譽とを奪つて、自分といふものゝ存在を社會の底に葬つて了ふであらう。殊に、八千代は門下の關口が戀してゐる女である。弟子の女を横取りしたとあつては、謹嚴清高の學徒として、尊敬されてゐる自分であるだけに、その非難の激しさも思ひやられる。自分は果して、その非難と闘つて行けるであらうか？ 六十年の努力によつて築きあげた地位と名譽とを、あの一の娘の爲めに打捨て、悔いなく自分であり得るだらうか？

否！ 否！

博士は首を振つた。——博士は、すべてを學問に捧げて、乾燥な研究室に生涯の大部分を過して來た自分を悔いながら、しかし、そこに獲來つたその名譽と地位との捨て難きを思はずにはゐられなかつた。

殊に、最近博士は、學者として最も光榮とす可き一つの椅子を、九重の雲深きあたりに與へらる

可く、その人選の中に交へられてゐた。此の大事の瀬戸際に、もし、そんな突飛な結婚などで、世の中の耳目を騒がすやうな事でも仕出来したならば、
 勿論、そんな馬鹿な事は出来ない。博士は斯うきつぱりと心の中で云つた。
 いや、結婚などは兎も角として、八千代とのこんな關係が若し世間にぱつとしたならば——そして、新聞の社會面などで問題にされでもしたならば、それこそ大變だ！ と、博士は續けて考へた。

然うだ。自分はおか／＼と、飛んでもない過ちのなかに深入りして來たものだ。あの女とは、もう此の邊できれいに關係を絶たなければならぬ——博士は、急に夢からでも醒めたやうにして然う心の中で云つた。八千代が、何か非常なコケツトか何かで、自分がつい、うか／＼と、その女郎蜘蛛の網の中にひつかけてられてでもゐたやうな、そんな氣が博士はして來たのであつた。
 八千代は、兎に角、遠ざけなければならぬ。それには矢張、關口と結婚させるより外は無。あの男は一切を知つたら勿論おどろきもすれば、腹を立ててもするだらう。が、おれが、あの男に分それだけの償ひをしてやればいゝわけだ。おれの力である男を、あの男の希望通り、教授にしてやる事も出来れば、その他いゝ／＼の有利な條件を與へてやる事も出来るのだ。あの男の必ず満足

するやうな取引で、あの男に八千代を渡してしまはう。
 葉卷の煙を吐きながら、博士は、こんな風に考へ續けたのであつた。

愛するが故に

その日も八千代は、朝から憂鬱に思ひ沈んでゐた。

土曜日なので、午前中に退けて来た道子の爲めに、算術の宿題を解いてやつたが、高等一年の、極く簡単な四則の問題を、幾度も解き違へたりした。

「御免なさいね道子さん。わたし、また間違へてしまつたわ。わたし、どうかしてゐるのよ。」

額に手をあて、雑記帳に書いた算式の上に眼を落して、ほつと溜息を吐く八千代の様子を、十三になる道子は不思議さうに打戾つてゐるが、

「いゝのよ。また、あとにさせよう。」

と、子供心にも氣の毒さうに云つた。

「さう？　でも、こんな問題がわからないなんて、をかしいわね。」

「今日はね、あたまがお悪いのよ。」

「えゝ。私、此のごろすつかり馬鹿になつてしまつたのよ。」

と、八千代は淋しく笑ひ乍ら云つた。

「何か心配していらつしやるんでせう、屹度。」

道子はませた調子で云つたが、

「ねえ。此ごろ、うちの人はみんなどうかしてゐるのよ。お父様はお父様で考へ込んでゐるし、お兄様はお兄様で考へ込んでゐるし、宮子さんは宮子さんで、泣いたり怒つたりしてゐるし——本當に、さうしたんでせう？」

ひとり、未だ、人間の悩みに眼覺めない道子には、總てが不思議な謎だつた。

「本當ね。みんなどうかしてゐるのね。」

八千代は考へ込むやうにして云つた。

「でもね、宮子さんが泣いたり怒つたりするわけは私知つてゝよ。」

と、道子は、自分の觀察を誇るやうな調子で問はず語りに語り續けた。

「宮子さんはね、お兄様が好きなのよ。でも、お兄様は、宮子さんが嫌ひなの。もちはさうぢやあ無かつたの。もとは、お兄様も宮子さんが好きだつたの。それで、二人はとても仲好しだつたんですけど、此の頃お兄様は何故だか知らないけれども宮子さんが嫌ひになつたのよ。それで、宮子さ

んは、すっかり悲觀しちやつてゐるの。宮子さんはね、だから、もう此の家には居無いですつて——何處かへ行つてしまふんだつて——」

「まあ、何處へ？」

八千代は胸を衝かれる思ひで問ひ返した。道子の無邪氣な言葉を、八千代は平氣では聞いてゐられなかつた。

「宮子さんはかはいさうよ。だつて、宮子さんには、仙臺に叔母さんがあるきりで、お父様も阿母様も無いんですもの。宮子さんには、この家より外自分のお家つてもものは無いんでせう。だから、北海道の尼様のお寺へ行くんですつて。」

「まあ、宮子さん、そんな事云つて居たの？」

「ええ。然う云つてゐたわ。」

「尼さんのお寺へなら、私も行き度いわね。」

「まあ、八千代さんまで？」

道子は驚きの眼を圓くして云つた。

「でも、私はもうそんな尊いところへは行けないわね。」

「八千代さんは、お嫁に行くんでせう？」

「いゝえ、お嫁になんぞ行かないのよ。お嫁にも行けず、尼寺へも行けず——どうしたらいいのでせうね。」

冗談らしい調子で云つたが、それは八千代の心の底の嘆きの聲だつた。

「うそよ。八千代さんはお嫁にいらッしやるんだわ。私ちやんと知つてるわ。」

「然う？」

と、八千代は笑つて、

「ぢや、私、何處へお嫁に行くか、道子さん、知つてゐて？」

「知つてるわ。關口さんでせう。」

道子は直感に云つた。

「まあ、然うか知ら？」

「昨日——ぢや無い一昨日だわ。關口さんとお父様とが種々話してゐるのを、私そつと聞いてやつたわ。よくは判らなかつたけれど、あなたの事らしかつたわ。」

道子は小賢しい顔附をした。

部屋に歸つた八千代は、しばらくの間ほんやりしてゐたが、戸外の空氣に觸れたら、少しは心持もさッぱりするかと、庭下駄を突ツかけて庭前に立ち出でた。

八千代が、垂籠め勝ちに物思ひに悩んでゐた間に、夏もいつか深くなつてゐた。みづみづしかつた樹々の若葉も、緑の影を濃やかにして、折からの曇り空に、重く枝垂れた緑の枝は、吐息のやうな風に、ものうく揺れてゐた。八千代は、枝を交した植込の中の小徑を二三十歩あるいて、廣い庭園の片隅の、身を隠すに便りのない場所に腰をおろした。

足もとに近い叢には、捨て植ゑの紅蜀葵が眞赤な花の二三輪を、欲求の象徴のやうに緑の中に浮べてゐた。八千代の眼は、一寸その花の上にと止められたが、彼女の思ひ疲れた眼には、その花の色はあまりに刺戟が強過ぎた。彼女は眼を膝の上に戻して、又してもじつと考へ沈むのであつた。

『八千代さん!』

十分間ばかり、然うして思ひ沈んでゐた八千代は、ふと、斯う呼びかけられて、ぱつとうしろを振向いた。關口謙三が、笑みを含んでそこに立つてゐた。

『あら! 關口さん。』

八千代は思はず、立ちあがつた。

『こんなところにいらしたんですね。僕、先刻から探して居たのですよ。』

『何時いらッしやいましたの。』

『一時間程前です。』

『まあ、私、些とも氣がつかせませんでしたわ。何處にいらしたの?』

『先生の部屋に居たのです。』

『然う。』

と八千代はさり氣なく云つたが、先刻の道子の言葉を思ひあはせて、何か深く思ひ入つたやうな謙三の顔附に胸を衝かれた。——實際謙三の表情には、未だ口を開かないうちに、無言の言葉で端的に押迫るやうな何ものかが締められてゐた。

『八千代さん。まあ、そこへおかけ下さい。僕は、あなたに、お話しし度い事があるのです。』

『何ででございます。』

云ひながら、八千代は再び腰をおろした。

『僕もそこへ掛け差して下さい。』

謙三は、八千代と並んで腰をおろした。

が、謙三は容易に口を開かうとはしなかつた。八千代も促がさうとはしなかつた。互の心臓の鼓動が聞き取られるほどの重苦しい沈黙の五六分がそこにあつた。

「八千代さん！」

謙三は思ひ切つたやうに口を開いたが、その聲は、ぎこちなく硬ばつてゐた。

「僕は、先生から——先生から——」

と、謙三は苦しく喘ぐやうにして、

「何も彼も聞いたのですよ。先生は、僕にすっかり告白されたのです。然うです。何も彼も——昨日の朝でした。先生は、僕にすべてを打明けて下さつたのです。」

「……………」

「僕は、實におどろきました。先生のやうな人が、そして八千代さんのやうな人が——僕は實に………いたです。驚いて、而して失望したのです。——僕は、先生から話されても、最初はどうしても信じられなかつた。先生が、そんな出鱈目を云つて、僕を試して見るんぢや無いかと思つたんです。けれども、不幸にして、それは矢張事實だつた！それが事實だと知つた時、僕は、いきなり、先生につかみかゝり度い氣がしたのです。」

「……………」

「けれども、人間といふものは、何人しも過失といふものがある。過失だ、一生の過失だ！さう云つて先生は僕にあやまるのです。先生にさうしてあやまられて見ると、僕は怒り続ける勇氣がなくなつたのです。そして、先生は云ふのです。みんなおれが悪いのだ。あの女には罪は無い。だから、あの女を責めて呉れるな——と。」

謙三は、昂奮して語り續けた。八千代は、相變らず一語も答へなかつた。

「ねえ。八千代さん。僕は實に煩悶したのです。先生からその恐ろしい告白をきかされた僕が、みんなに、みじめな男であつたか？どうぞ察して下さい。けれども、僕は、その煩悶の中から立ちあがりました。あなたに罪はない。さうです、あなたには罪が無いのです。たとへ、身體はどうあらうと、あなたの心は純潔なのです。僕の愛は、そんな事ぐらゐで褪めたり減じたりはしないのです。——ねえ、八千代さん、そんな事ぐらゐで、求婚を撤回するほど、僕の愛は淺薄なものぢや無いのです。お願ひです。どうぞ、僕と結婚して下さい。ねえ、僕と結婚して下さい。」

「ぢや、何も彼も忘れて、私と結婚して下さい。八千代は、割合に冷靜な調子で云つた。」

八千代は、割合に冷靜な調子で云つた。

「えい、何も彼も忘れず。だから、あなたも氣にしないで下さい。あなたが、處女でないといふ事など、僕のあなたに對する深い愛の前には問題では無いのです。——それに、あなたには責任の無い事なのです。先生は、然う云ひました。あなたには罪は無いと。」

と、八千代はかぶりを振つた。そして云つた。

「私にだつて責任があるのですわ。これが罪なら、私にだつて罪があるのですわ。」

「あなたに罪があるとは僕思ひません。罪は全く先生にあるのです。先生は云ひました。自分の罪はゆるされない。お前どうぞ、此の罪のつぐなひをして呉れと、此の罪をつぐなひ得るものは、お前の愛だと。お前の愛で、どうぞ、あの人を幸福にして呉れと。——さう先生は僕に云つたのです。」

「まあ！」

と、八千代は嘲るやうに云つた。

「先生は随分勝手な事を仰有るわね。罪は自分で犯して置いて、償ひは他にさせる——ずる分むしのいゝ話ですわね。そして、そんな勝手な注文を、はいくゝと引受けるあなたは、ずる分忠實なお

弟子さんだわね。」

八千代の言葉は、謙三の熱した調子に冷やかな水を注いだ。謙三は、意外な面持で、八千代の横顔を見やつたが、

「どうしてそんな風に皮肉に仰有るのです？ 僕は一生懸命なのです。」

「あなたのお心持は、それはありがたいと思ふのですけれど。——でもね、關口さん！ あなたは本當に私が許せて？」

八千代はまじめな調子になつた。

「許せます！ 屹度、許せます。愛はすべてを許します。本當に愛する者は、どんな事でも許せない事は無い筈です。」

「どんな事でも——？」

「えい。どんな事でも——。」

「いゝえ。そんな事は云ひきれない筈ですわ。」

「僕は云ひ切れます。」

「ぢや、關口さん、私に、未だあなたの知らないどんな事があつても、あなたは屹度私と結婚する

事が出来て？』

『出来ます。』

謙三はきつぱりと云つた。

『それが誓へて！』

『誓ひます！』

『駄目よ。口だけでなら、どんな誓ひでも出来るんだけど。——ね、關口さん、そんな誓ひはなさらぬ方がいゝわ。そして、どうぞ、もう私と結婚しようなどは思つて下さいますなね、私、結婚のお話なら、一度、はつきりとおことわりした筈ぢやございませんか？』

『何故、あなたはそんな事を云ふのでせうね。』

謙三は、躍起になつて云つた。

『私ね、どうしても結婚が出来ないわけがありますの。』

八千代は嘆息するやうに云つた。而して、心の中で云つた。此の人は本當にすべてを忘れて私と結婚する氣かも知れない。だが、私は、もう處女で無いだけではない、私はもう母になりかけてゐるのだ。もし、此の事を、此の人が知つたならば——

『どういふわけなのです。云つて見て下さい。』

『それは云へません！』

『いや、どんな理由があらうとも、僕の愛の前にそれが何でせう？僕は、そんな理由なんぞ聞き度くはないのです。どうぞ八千代さん！僕と結婚して下さい。僕の爲に——そして、先生の爲めにも——ね、先生もあなたの事は心配してゐるんですから。』

『先生も心配して——？先生は御深切でいらつしやいますからね。』

八千代は反語的に云つた。

『そんな理由があらうとも、僕の愛は、そんな理由なんぞ乗り越えます！八千代さん、どうぞ結婚して下さい。』

謙三は執拗に繰返した。彼は、いつの間にか犇と八千代に寄り添うて、その肩と肩とが摺れくになつて居た。彼の熱い臭気は、八千代の耳朶を燻くばかりであつた。

『駄目よ、そんな事を仰つても——ね、どんなにあなたが私を愛して下さいと、いゝえ、あなたが私を愛すれば愛するほど、あなたが私を許せない一つの理由がありますの。それは先生も未だ御存じないのです。私は何故か、先生にもそれは話し度くないのです。どうせ、いまにわかる事な

のですけど、わかるまでは何人にも云ひ度くないのです。』
『話して下さい！ 僕にだけは話して下さらなければならぬのです。兎に角、話して見て下さい。』

『あきらめて頂くために、ぢや、あなたにだけはお話ししますわ。あなたにだけは、お話しする義務があるやうですからね。』

八千代は、案外冷然とした調子で云つた。

『私はね、關口さん、たゞの身體では無くなつてゐるのです。』

謙三は、はつと息を呑むやうにして、じつと八千代の顔を打戾りながら、

『たゞの身體ではない？』

と、鸚鵡返しに云つた。

『さうです。』

『といふと——？』

『おわかりになりませんか？ 私、もう母になりかけてゐるのです。』

『母に、——ぢや、妊娠？』

謙三は朱然とした。その凍つたやうな無表情が、次第に名状す可からざる混亂に變つて行つた。

それを見るのは、八千代も流石に辛かつた。八千代は、つと腰掛から立ちあがると、棒立に突立つてゐる謙三をあとに残して歩き出した。

八千代が、家にはひらりとすると、そのヴェランダの柱に凭れて、幹太郎がほんやりと立つてゐるのに氣がついた。幹太郎の眼は、例のやうに、自分の知らぬ間に横の方からそつと覗き込んでゐるやうな、偵察的な輝きを帯びてゐた。

『幹太郎さん。どうしてゐるの？』

八千代は、わざとらしい氣輕さで斯う呼びかけた。

『關口さんは、何處にゐるんです？』

幹太郎は、ぶツきらほうに云つた。

『關口さん？ 私、知りませんわ。』

八千代はしらを切つた。

『八千代さんは、今、關口さんと何か話をしてゐたんぢや無いんですか？』
幹太郎の眼は鋭く光つた。——立ちぎきでもしてゐたのか知ら？ 八千代は、思はずどきりとし